1989

長土呂遺跡群

上大林・下聖端遺跡

長野県佐久市長土呂上大林・下聖端遺跡発掘調査概報

1989年3月

長野県佐久市教育委員会

H 5 号住居址出土遺物

H 5 号住居址出土無蓋高坏・有蓋高坏（11－12～14）

例　　言

1　本書は、1988年５月20日～12月29日に渡って発掘調査した。長野県佐久市大字長土呂字上大林・下大林・下聖端・南聖原に所在する上大林・下聖端遺跡の発掘調査概報である。

2　本調査は、林幸彦・羽毛田卓也を担当者とし、地元他多数の方々の協力を得て実施した。

3　本調査は、佐久建設事務所の委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。

4　本書に挿入した遺構の実測図作成には、羽毛田・細萱ミスズ・内藤治伸・木島美子・小林よしみ・内山克己があたり、遺物の実測図作成は、羽毛田・内藤・渡辺久美子・宇賀神恵が担当した。また、遺構・遺物のトレスは、羽毛田・細萱・小林が行った。掲載した写真は羽毛田が撮影した。

5　本書の執筆・編集は、羽毛田が行い、林が校閲した。

6　出土した全ての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

7　発掘調査にあたり、御指導・御協力をいただいた方々に、記して厚くお礼申し上げます。
（順不同・敬称略）
木内捷、児玉卓文、笹沢浩、由井茂也、黒岩忠男、井出正義、神村透、桐原建、金井塚良一、前原豊、川島雅人、小坂井孝修、関川尚功、木下亘、花岡弘、丸山敞一郎、堤隆、臼田武正、川上元、塩入秀敏、郷道哲章、森泉かよ子、寺島俊郎、近藤尚義、福島邦男、田中正二郎、宮下健司、森島稔、小平恵一、髙村博文、三石宗一、小山岳夫、須藤隆司、小林真寿、竹原学、沢田正昭、肥塚隆保、羽毛田伸博、木内晶義、翠川泰弘、助川朋広、篠原浩江、小林正春、百瀬長秀、小平和夫、竹内稔、新井真博、矢島宏雄、佐藤信之、山根洋子、神沢昌二郎、矢口忠良、直井雅尚、熊谷康治、高桑俊雄、関沢聡、小林康雄、長崎元広、宇賀神誠司、高林重水、桜井弘人、山下誠一、諏訪間順、諏訪間伸、鳥居亮、片山徹、岡村渉、上村安生、田村孝、古郡正志、小島純一、清野利明

凡　　例

1　遺構の略称

H→住居址、F→掘立柱建物址、D→土坑、M→溝状遺構、T→特殊遺構

2　遺構・遺物の縮尺は原則として次のとおりであり、図中にスケールを付した。

1）遺構　住居址・特殊遺構→1／80、カマド→1／30

2）遺物　須恵器・土師器→1／4

3　挿図中におけるスクリーントーンは下記のものをあらわす。

1）遺構　断面→斜線、カマド→点

2）遺物　須恵器断面→点、黒色処理→点、塗彩→点

4　遺構の海抜標高は、各遺構ごとに統一し、水糸ラインに水糸標高として明記した。

5　写真図版中の遺物の縮尺は、原則して1／3とし、他のものは明記した。

6　写真図版中の番号は、挿図番号と対応する。

7　遺物番号は簡略化し、第３図１は３－１とした。

8　各一覧表の数値について、不明は一、現存値は＜　＞、推定値は（　）とした。

9　遺物の実測は、第三角法を用いたが、適宜第三角法の応用で作図したものである。

10　遺物胎土の色調は、一覧表の備考覧に、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・㈶日本色彩研究所色票監修　1987年度版『新版　標準土色帖』の表示に基づいて示した。

11　挿図中の略記号は次のとおりである。

P→ピット、S→石、土層断面中のP→土器、T→炭化材

本文目次

例言
凡例
本文目次
第Ⅰ章　発掘調査の経緯……1
1　調査に至る動機……1
2　調査の概要……2
3　調査日誌……5
4　発掘調査の方法……6
第Ⅱ章　層序……7
第Ⅲ章　遺構と遺物……8
1　住居址……8
1）Ｈ１号住居址……8
2）Ｈ２号住居址……8
3）Ｈ３号住居址……9
4）Ｈ４号住居址……9
5）Ｈ５号住居址……10
6）Ｈ６号住居址……18
7）Ｈ７号住居址……19
8）Ｈ８号住居址……19
9）Ｈ９号住居址……19
10）H10号住居址……20
11）H11号住居址……20
12）H12号住居址……21
13）H13号住居址……21
2　掘立柱建物址……21
1）Ｆ１号掘立柱建物址……21
2）Ｆ２号掘立柱建物址……27
3）Ｆ３号掘立柱建物址……28
4）Ｆ４号掘立柱建物址……28

5）Ｆ５号掘立柱建物址……28
6）Ｆ６号掘立柱建物址……28
7）Ｆ７号掘立柱建物址……29
3　特殊遺構……29
4　土坑……30
5　溝状遺構……30
1）Ｍ１号溝状遺構　30
第Ⅳ章　まとめ……31
参考文献……32
写真図版

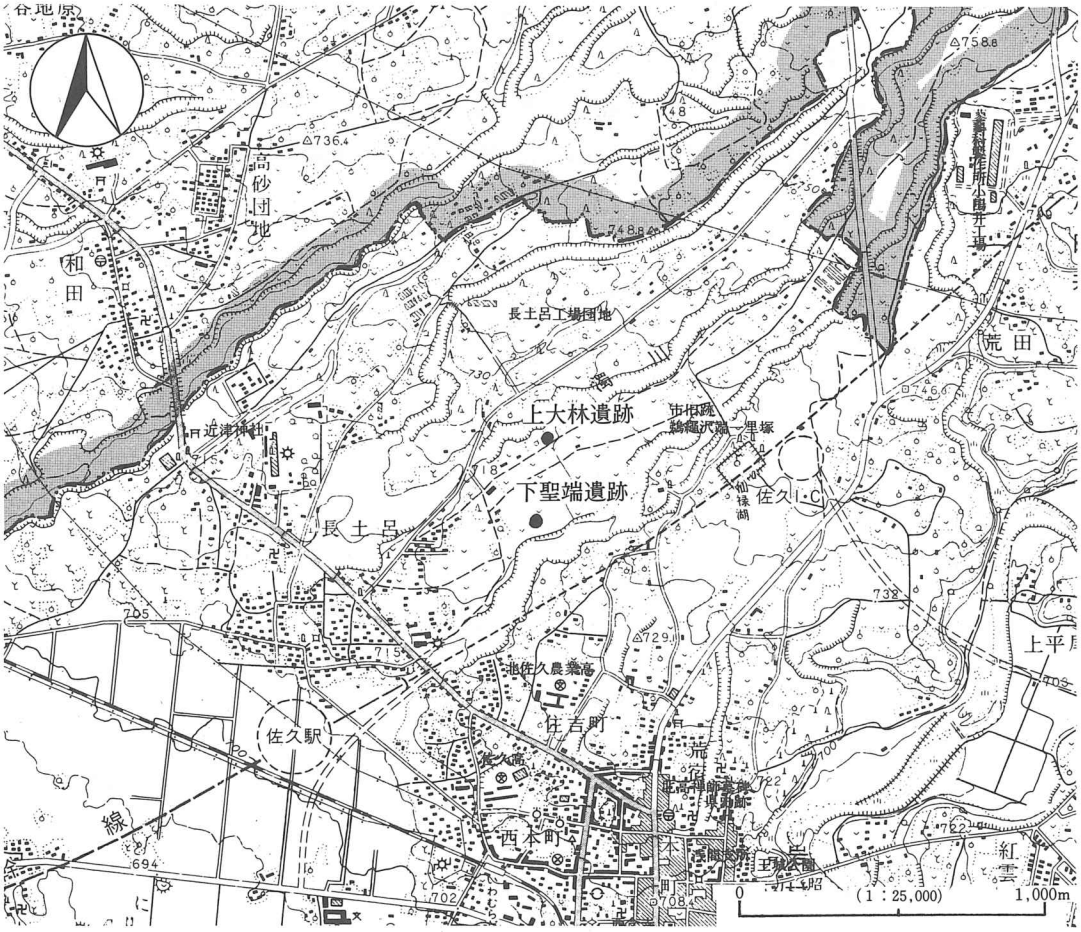
第Ⅰ章　発掘調査の経緯

1　調査に至る動機

長土呂遺跡群は、佐久市大字長土呂に所在し、浅間山に源を発する濁川の浸蝕による田切地形の南側の標高720m～760mの段丘上に展開する大遺跡群である。上大林・下聖端遺跡はその遺跡群中、字上大林と、字下聖端に所在する遺跡である。

今回、佐久建設事務所が行う道路改良事業（路線名141号線）に伴い、同事務所と佐久市教育委員会とで協議の結果、両遺跡の破壊を余議なくされ、緊急に記録保存する必要が生じた。そこで佐久建設事務所より委託を受けた佐久市教育委員会が主体となって発掘調査する運びとなった。

（事務局）



第１図　長土呂遺跡群上大林・下聖端遺跡位置図（１：25,000）

2　調査の概要

遺跡名　　長土呂遺跡群　上大林・下聖端遺跡　（ＮＫＳ）

所在地　　長野県佐久市大字長土呂字上大林165-1、下大林548-1、下聖端182、南聖原516-2他

調査期間　1988年５月20日～1989年３月31日

調査団の構成

〔事務局〕

教育長　　大井昭二

教育次長　　茂木多喜男

社会教育課長　北沢　馨

　　相沢幸男（社会教育課主幹、198８年10月就任）

社会教育係長　小平　実

社会教育係　　東城公人、小林正衛(1988年12月就任)、林　幸彦、萩原一馬、山浦俊彦、羽毛田卓也、田村和広

　　市村美咲（1988年９月退任)、五十嵐孝子（1988年10月就任・同年12月退任)、荻原香代子（1989年１月就任)、岩崎こずえ（1989年２月就任）

社会教育指導員　三石和子（1988年８月退任）

〔調査団〕

調査団長　白倉盛男

調査副団長　藤沢平治

調査担当　林　幸彦、羽毛田卓也

調査主任　佐々木宗昭

調査員　井上行雄、大井今朝太

調査補助員　浅沼ノブ江、市川香里、井出百合子、宇賀神恵、遠藤しづか、大井恵美子、片井裕子、金森治代、木島美子、堺　益子、高杉昌子、田中夏江、内藤治伸、並木ことみ、橋詰勝子、橋詰けさよ、橋詰信子、星野良子、細萱ミスズ、山崎平八郎、和久井義雄、渡辺久美子、田村祐子

参加者（順不同）　浅田務、内山克己、小林よしみ、小間沢文代、堀篭因、篠原悟、依田みち、早川光彦、並木吉三郎、中山正二郎、森泉秀夫、佐藤紫郎、菊地ともえ、篠崎昭二、小林光枝、角谷春江、渡辺住礼、青柳博、多胡照子、木内一也、山崎明、宮川洋、小林薫、塩川克史、市川誠司、松田英明、江原正則、高橋きくえ、岡部敦久、香山優子

他高校生

第２図　国道141号線佐久ー小諸(長土呂区間)改良事業全体図(１：10,000)
〔佐久都市計画道路網図より〕

3　調査日誌

○1988年５月18日～５月19日

調査区域の確認、打ち合せを現地にて行う。

○1988年５月20日～５月24日

機器材の搬入を行う。

○1988年５月20日～

重機による表土剝ぎ、ダンプカーによる表土移動、遺構確認のための精査を行う。

○1988年６月７日～

遺構の堀下を開始する。

○1988年６月20日～

遺構の実測・写真撮影を開始する。

○198８年８月３日～５日

第９回佐久市少年考古学教室を開催する。

○1988年８月４日

上大林遺跡の航空測量と航空写真撮影を行う。

○1988年12月２日

下聖端遺跡の航空測量と航空写真撮影を行う。

○1988年12月29日

下聖端遺跡の現場作業が終了する。

○1988年12月～

機器材の整備・遺物の区分作業を行う。

○1989年１月～

遺物の水洗・注記作業を始める。

○1989年２月～

遺物の復原・実測・写真撮影を行う。

○1989年３月～

Ｈ５号住居址の図面修正・トレスを行う。

○1989年３月～

概報の原稿執筆・編集作業を行う。

4　発掘調査の方法

本遺跡の調査を実施するにあたり、基本的な調査方法を次のような確認事項をもって実施した。

1　調査はグリッド方式で行う。調査全体を４m×4mの方眼に組み、南北ラインを数列とし、北より１・２・３……、東西ラインは東よりあ・い・う……の順で番号と記号をつけ、各グリッドの北東交点をそのグリッド名とした。

2　住居址はⅠ～Ⅳの４区に分割し、その東西・南北ラインで土層断面図を実測した。

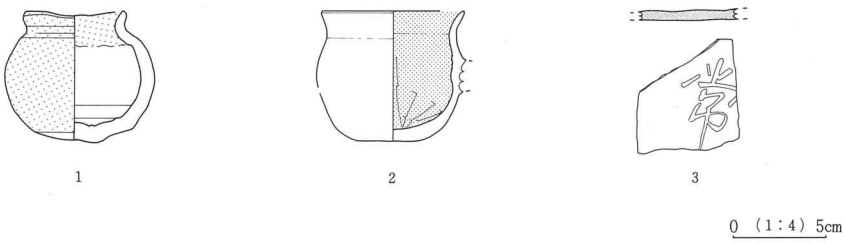
3　カマドは原則として四分割し、主軸ラインで土層断面図を、主軸に直交するラインで横断図を実測した。

4　土坑は、長軸ラインで二分割して調査を行った。

5　溝は全調査を原則としたが、随時トレンチ調査を併用した。

6　土層は、『新版　標準土色帖』で決定し、粘性と含有物を観察した。

7　住居址内の出土遺物は、原則として各層ごとに位置と標高を記録した。

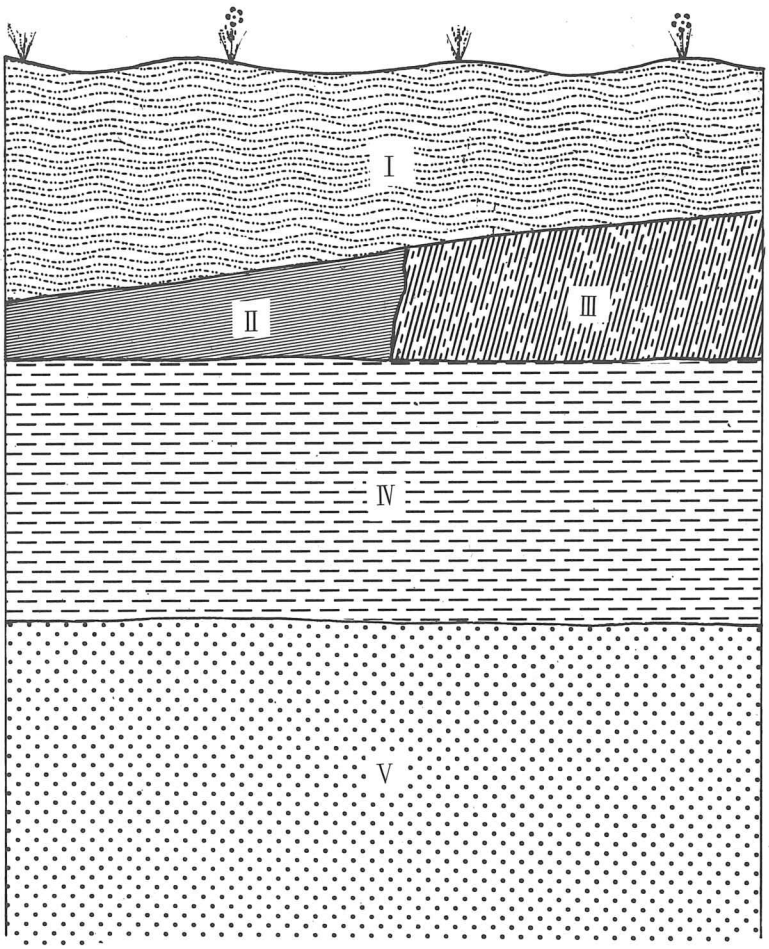


第３図　Ｍ１号溝状遺構出土遺物実測図

第１表　Ｍ１号溝状遺構出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
3－1	小型壺	口径 5.1 胴径 7.9 器高 6.9	底部丸底	内外面ヨコナデ 塗彩（暗赤褐色）内面頸部上外面底部以外全面	小型丸底壺 10YR5/6(外)
3－2	小型甕	口径 7.5 器高 6.9	胴部中央一ヶ所に把手が付く	口縁部内外面ヨコナデ 胴外面ヘラケズリ後ヘラナデ 胴内面ヘラナデ 内面黒色処理	外10YR5/6
3－3	坏（須）	——		底部回転ヘラケズリ	刻書「常」 2.5YR4/1

第II章　層序



第４図　層序模式図

上大林遺跡と下聖端遺跡の基本層序は、調査区の東側面において実測した。

第Ｉ層は、耕作の影響下で成立した黒褐色土、第II層は、粘性が弱く、パミス小粒を微量含む黒褐色土、第III層は、粘性がやや弱く、パミス小粒～極小粒とローム粒子を含む褐色土、第IV層は、パミス極大粒～小粒を多量に含む明黄褐色土(ローム)、第Ｖ層は、パミス極大粒～小粒を多量にスコリアと砂粒を微量含むにぶい黄橙色土（ローム）である。

第Ⅲ章　遺構と遺物

長土呂遺跡群上大林遺跡・下聖端遺跡より検出された遺構は以下のとおりである。

上大林遺跡	竪穴住居址	― 1軒（古墳時代後期）
	掘立柱建物址	― 1棟（古墳時代後期か）
	土坑	― 98基（落し穴1基を含む）
下聖端遺跡	竪穴住居址	― 12軒（古墳時代後期・奈良時代中葉）
	掘立柱建物址	― 6棟（古墳時代後期か）
	溝状遺構	― 5条
	特殊遺構	― 7基（詳細は以下本文）
	土坑	― 344基（落し穴・風倒木址を含む）

1　住居址

1）H1号住居址

H1号住居址は、上大林遺跡の調査区北側中央、か・き―3～5グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において単独で検出された。

ピットは、主柱穴4個、補助柱穴5個、入口施設2個、貯蔵穴1個の計12個が確認された。なお貯蔵穴は東南コーナーに設けられていた。

周溝は、ほぼ全周が確認され、周溝内ピットが検出された。

カマドは北壁中央において検出された。残存状況は比較的良好で、煙道天井部・煙道・両袖が残存していた。

本住居址は焼失住居址で、西南部において多量の焼土と、炭化材が確認された。

遺物は、土師器の甕・甑・坏・埦・高坏等が出土している。12―1・2は坏で、1は外稜及び内稜を持つタイプである。

以上より本住居址の所産期は、古墳時代後期の前葉に近い中葉に位置付けられる。

2）H2号住居址

H2号住居址は、下聖端遺跡の調査区南側、ふ・へ―86～88グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。

ピットは、主柱穴４個、入口施設１個、貯蔵穴１個の計６個が確認された。なお、貯蔵穴は北東コーナーに設けられていた。また周溝は、ほぼ全周で確認された。

カマドは、北壁中央において検出された。残存状況は非常に悪く、燃焼部の一部が残存するのみだった。

本住居は焼失住居址と考えられ、覆土中に炭化材の小片が多量に認められた。

遺物は、土師器の甕・甑・坏等が出土している。12―３は甑で、このタイプでは珍しく把手が付けられていない。

以上より本住居址は、古墳時代後期の中葉に近い後葉に位置付けられる。

３）Ｈ３号住居址

Ｈ３号住居址は、下聖端遺跡の調査区南側、へ・ほ―89・90グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。また、北側をＭ１号溝状遺構に、床面中央をＴ６号・Ｔ７号特殊遺構によって破壊される。

ピットは主柱穴２個のみ確認された。また、周溝は南壁を中心に確認された。

カマドは北壁中央において検出された。袖石と天井石が残るが、袖石より北側はＭ１号溝状遺構によって破壊される。

遺物は、甕・坏等が出土している。

以上より本住居址は、古墳時代中期末（カマド出現期）に位置付けられる。

４）Ｈ４号柱居址

Ｈ４号住居址は、下聖端遺跡の調査区南側、は・ひ―90・91グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。また、攪乱とＭ１号溝状遺構によって破壊される。

ピットは、主柱穴２個、貯蔵穴１個の計３個が確認された。なお、貯蔵穴は南壁中央で突出して検出された。また周溝はほぼ全周で確認された。

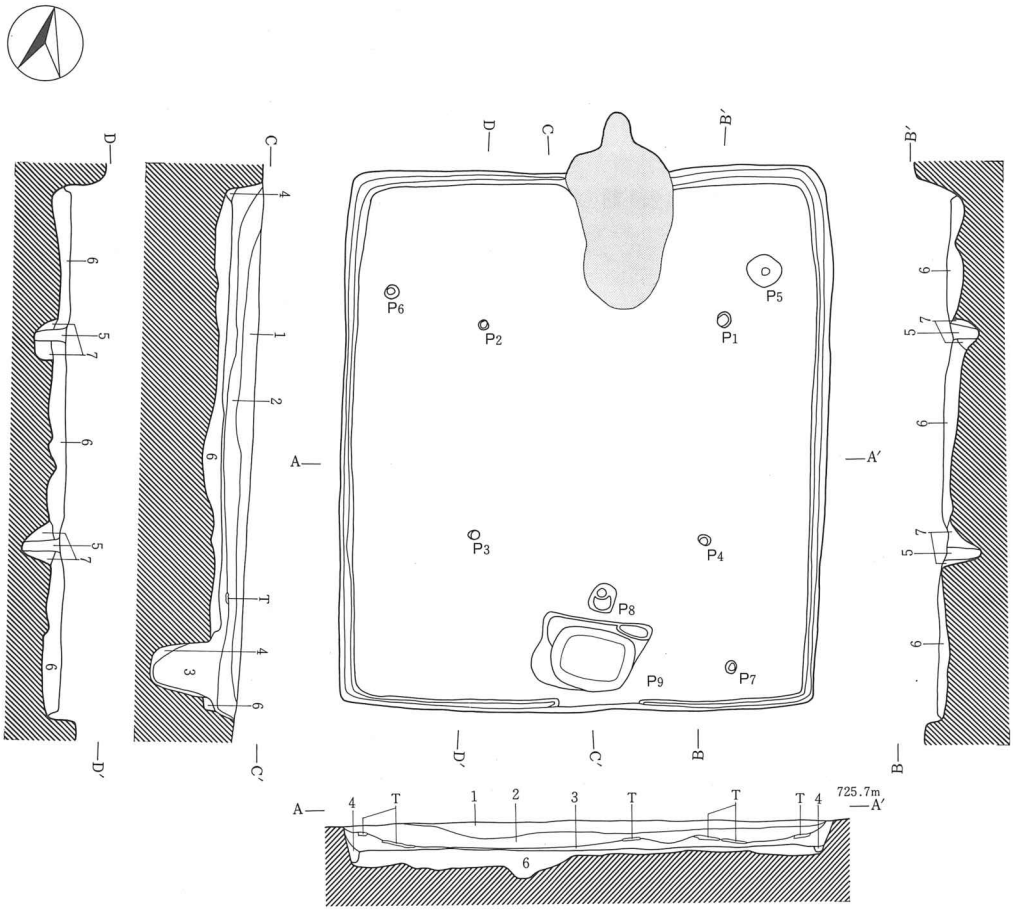
カマドは北壁中央において検出された。

本住居址は焼失住居址で、床面はかなり焼け、北東コーナーに焼土の堆積が認められた。

遺物は、土師器の甕・手捏・坏・甑・坏蓋と須恵器の高坏の脚部が出土している。12―４は小型甕でカマドの支脚として使われていた。12―５は、須恵器の工人が須恵器製作技法によって作り、土師のカマで焼いた土師器と考えられる。12―６は手捏で貯蔵穴より出土した。

以上より本住居址の所産期は、古墳時代後期の前葉～中葉に位置付けられる。

5）H５号住居址



1　黒褐色土層　粘性やや弱し。パミス極小粒とローム粒子を微量、炭化材小片を少量含む。

2　暗褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子と炭化粒子を少量含む。

3　褐色土層　粘性やや弱し。焼土ブロック（にぶい赤褐色土）・焼土粒子・炭化材小片・炭化粒子を多量含む。

4　にぶい黄褐色土層　粘性弱し。ローム粒子を多量、炭化粒子と焼土粒子を少量含む。

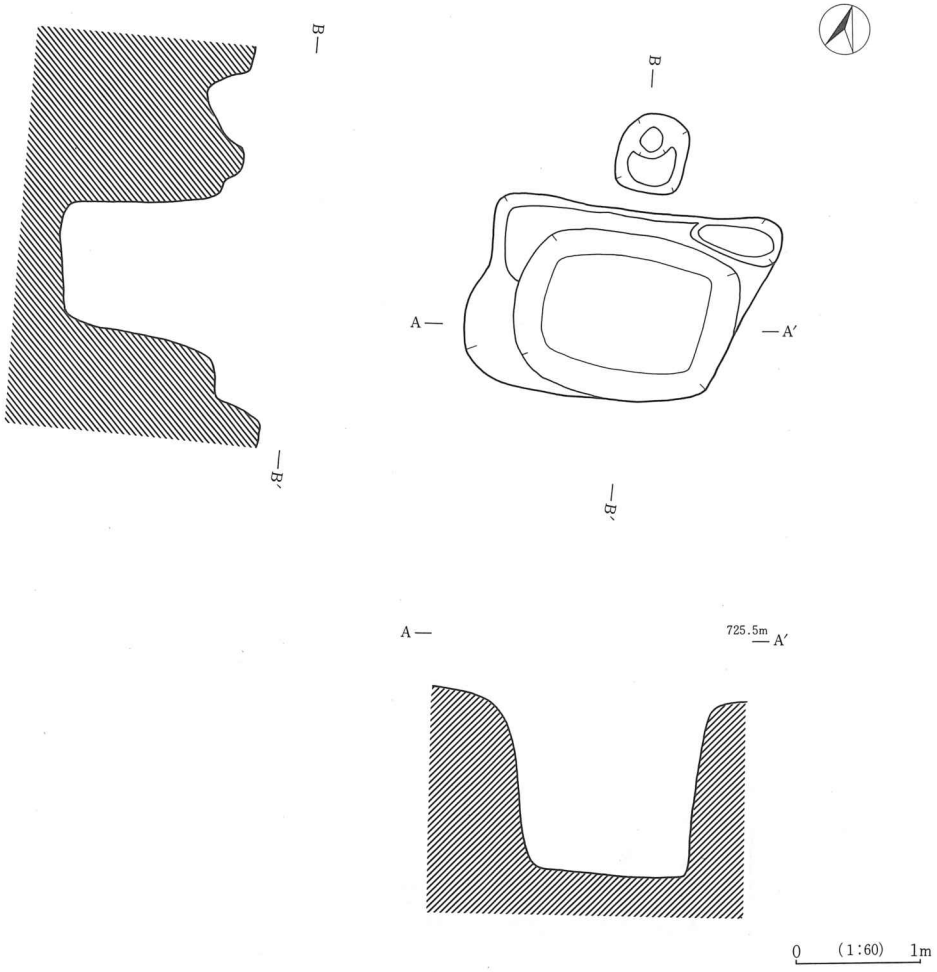
5　黒色土層　粘性やや弱し。炭化材小片と炭化粒子を少量含む。

6　黄褐色土層　粘性やや強し。ローム粒子を多量含む。

7　黒褐色土層　粘性やや強し。ローム粒子を微量含む。

0　（1：80）　2 m

第５図　H５号住居址実測図



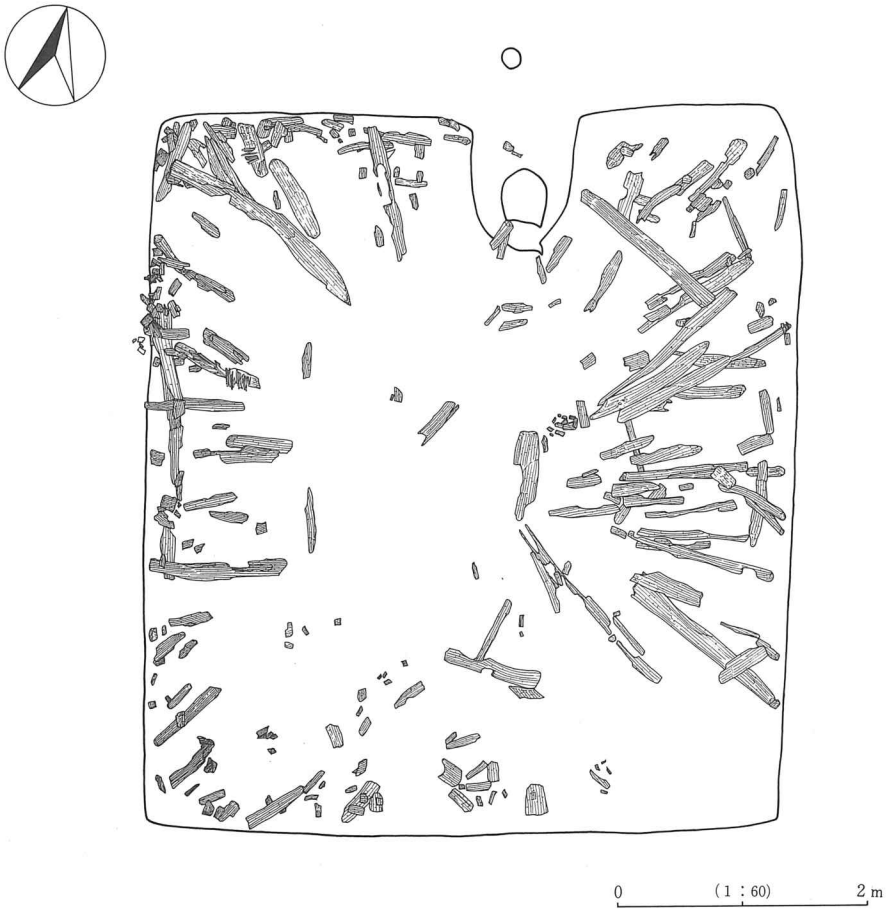
第６図　Ｈ５号住居址貯蔵穴実測図

Ｈ５号住居址は、下聖端遺跡の調査区南側、の～ひ―87～89グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。

平面形態は、南北551cm、東西は519cmを測り、やや南北に長い方形を呈している。主軸方位はＮ―16°―Ｗを指す。

覆土は５層に分割された。第１層は、粘性がやや弱く、パミス極小粒とローム粒子を微量・炭化材小片を少量含む黒褐色土、第２層は、粘性がやや弱く、ローム粒子と炭化粒子を少量含む暗褐色土、第３層は、粘性がやや弱く、焼土ブロック（にぶい赤褐色土及び黒褐色土）と焼土粒子・炭化材小片・炭化粒子を多量に含む褐色土、第４層は、粘性が弱く、ローム粒子を多量、炭化粒子と焼土粒子を少量含むにぶい黄褐色土、第５層は、粘性がやや弱く、炭化材小片と炭化粒子を少量含む黒色土である。なお炭化材は、第３層中及び上面において検出された。また第５層は柱痕である。

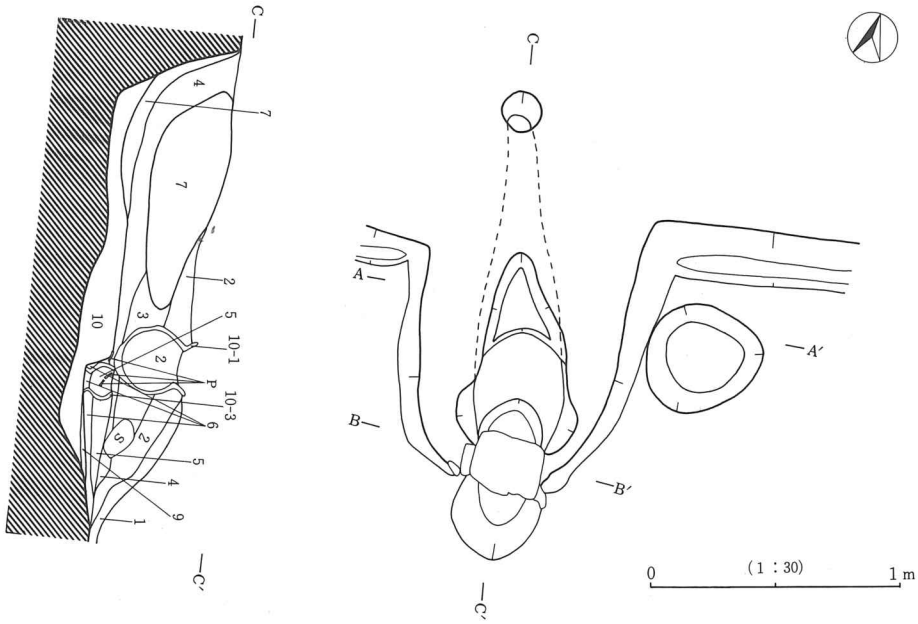
確認面からの壁残高は、12.5cm～41cmを測り、壁体は全体層序第Ⅳ層の明黄褐色土を利用し、

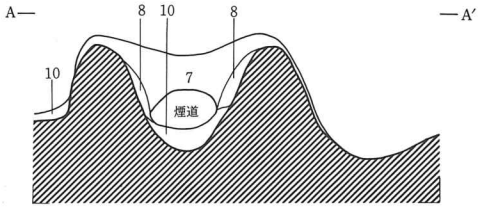


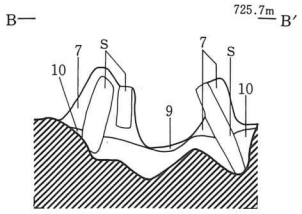
第７図　Ｈ５号住居址炭化材分布図

平滑で堅固である。床面はおおむね平坦で貼床と周溝が認められた。貼床は第６層の粘性がやや弱く、ローム粒子を多量に含む黄褐色土によって貼られている。また第７層の粘性がやや弱く、ローム粒子を微量含む黒褐土は、柱を据える際の埋土と考えられる。周溝は、カマドと貯蔵穴の南側でとぎれる他は全周している。なお床面積は28.15㎡を測る。

ピットは、主柱穴４個（Ｐ１～Ｐ４）、補助柱穴３個（Ｐ５～Ｐ７）、入口施設１個（Ｐ８）、貯蔵穴１個（Ｐ９）の計９個が検出された。Ｐ１は径15㎝×18㎝で深さ34㎝、Ｐ２は径11㎝×12㎝で深さ35㎝、Ｐ３は径10㎝×13㎝で深さ46㎝、Ｐ４は径12㎝×14㎝で深さ42.5㎝、Ｐ５は径33㎝×39㎝で深さ11.5㎝、Ｐ６は径15㎝×16㎝で深さ12㎝、Ｐ７は径12㎝×16㎝で深さ9.5㎝、Ｐ８は径28㎝×31㎝で深さ17㎝、Ｐ９は径116㎝×75.5㎝で深さ72㎝を測る。なお、Ｐ９の貯蔵穴は北側にテラスを持ち板蓋が想定される。







1　黒褐色土層　粘性やや弱し。炭化材小片と粘土粒子を微量含む。

2　暗赤褐色土層　粘性やや弱し。炭化材小片と粘土粒子を少量含む。

3　灰褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子と粘土粒子・焼土粒子を少量含む。

4　黒褐色土層　粘性弱し。炭化粒子と焼土粒子を少量含む。

5　赤褐色土層　粘性弱し。ローム粒子と焼土粒子を少量含む。

6　赤褐色土層　粘性弱し。焼土主体。炭化粒子を微量含む。

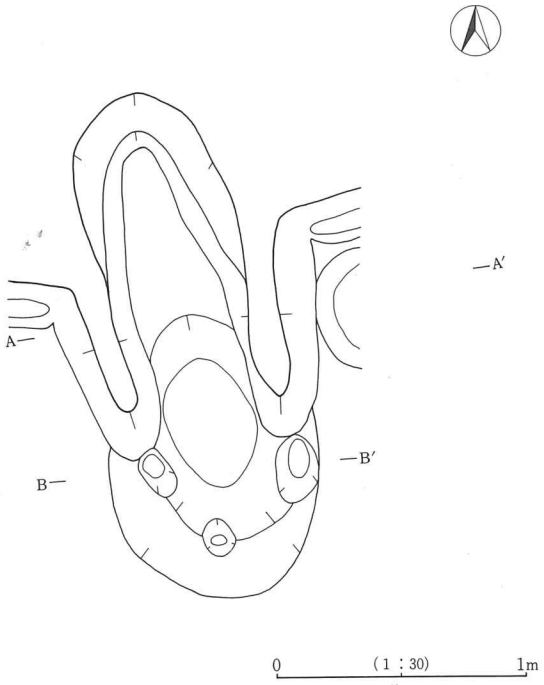
7　赤灰色土層　粘性強し。粘土主体。被熱で変色。

8　灰赤色土層　粘性やや強し。粘土主体。ローム粒子を少量含む。被熱で変色。

9　にぶい赤褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子を多く含む。被熱で変色。

10　暗褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子と炭化粒子を少量含む。

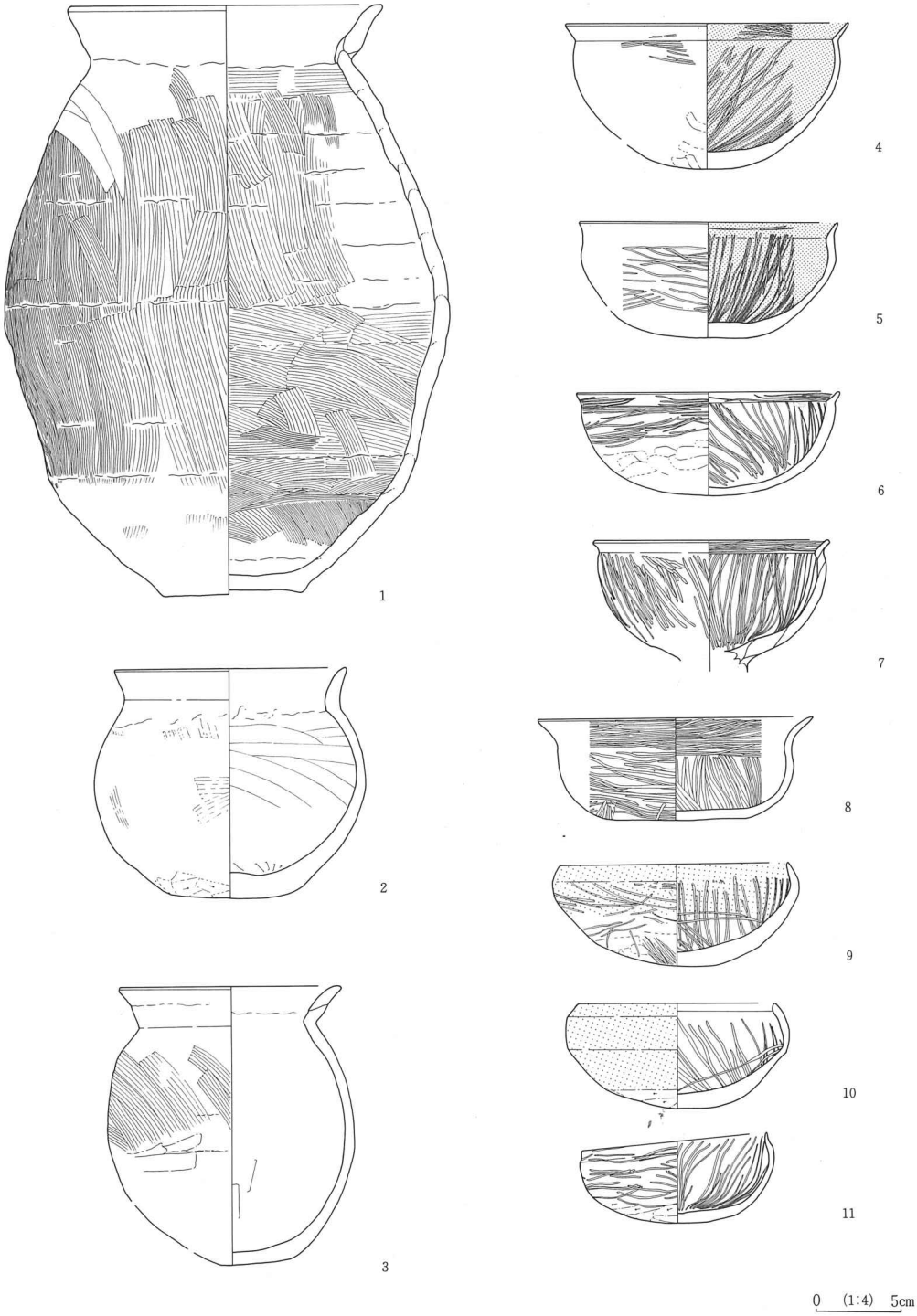
第8図　H5号住居址カマド実測図



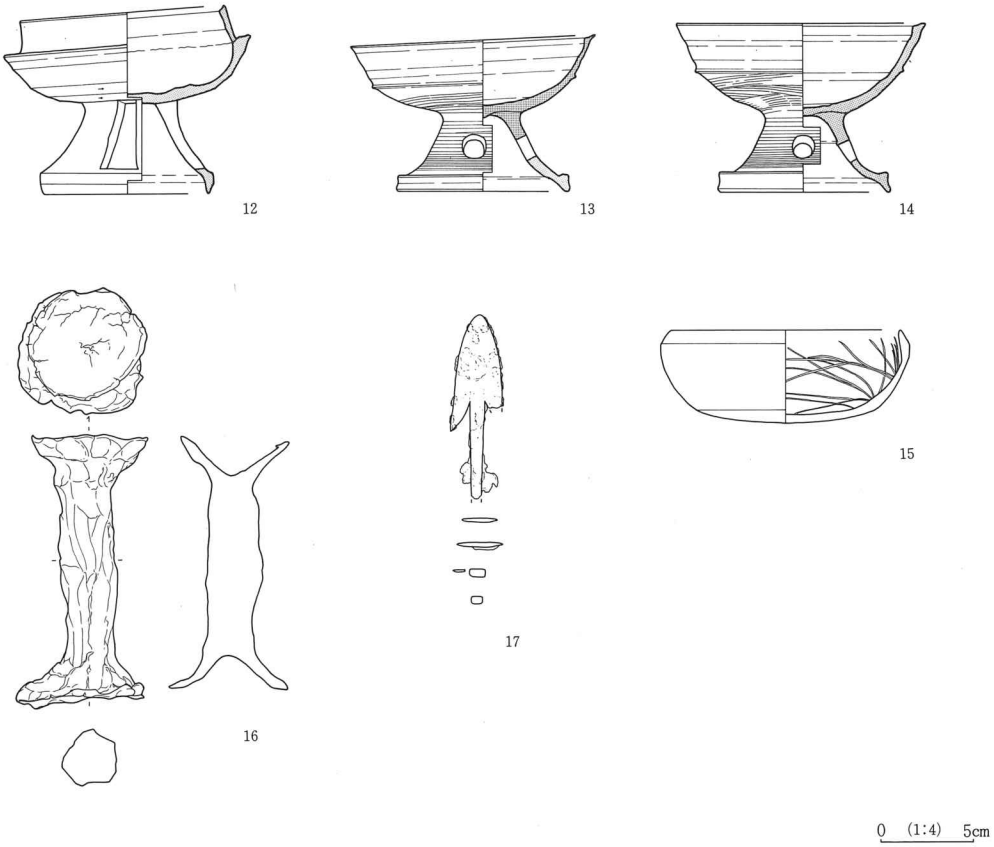
第９図　Ｈ５号住居址カマド堀方実測図

カマドは北壁中央よりほぼ完全な形で検出された。規模は、焚口より煙道出口まで187cm、袖の最大巾117cm、かけ穴の巾44cmを測る。東側の袖は長さ89cmで巾36cm・高さ30cm～20cm、西側の袖は長さ104cmで巾45cm・高さ32.5cm～23.5cmを測る。東側の袖石は２個で、長さ32cmと長さ17cmの安山岩、東側の袖石は長さ38cmの安山岩である。また天井石は28cm～23cmで厚さ８cm～10cmを測り、西袖石よりずり落ちた状態で検出された。また、かけ穴には10―１と２の甕がかけられた状態で出土している。覆土は６層に分割された。第１層は粘性がやや弱く、炭化材小片と粘土粒子を含む黒褐色土、第２層は粘性がやや弱く、炭化材小片と粘土粒子・焼土粒子を少量含む暗赤褐色土、第３層は粘性がやや弱く、ローム粒子と粘性粒子、焼土粒子を少量含む灰褐色土、第４層は、粘性が弱く、炭化粒子と焼土粒子を少量含む黒褐色土、第５層は粘性が弱く、ローム粒子と焼土粒子を少量含む赤褐色土、第６層は、粘性が弱く、炭化粒子を微量含む焼土主体の赤褐色土である。カマド各部の構築状況は以下のとおりである。煙道の天井部は、第７層の粘性が強く、粘土主体の赤灰色土（熱を受け変色）によって構築される。また袖は、第７層と第８層の粘性がやや強く、ローム粒子を少量含む粘土主体の灰赤色土によって、燃焼部と煙道下部は第10層の粘性がやや弱く、ローム粒子と炭化粒子を少量含む暗褐色土によって構築される。

遺物は、土師器の甕・坏・高坏と須恵器の高坏、土製支脚、鉄鏃等が出土している。10―１と



第10図　Ｈ５号住居址出土遺物実測図(1)



第11図　Ｈ５号住居址出土遺物実測図(2)

２はカマドにかかった状態で出土した甕である。10―４～６と10―8～11、11―15は坏である。11―12～14は須恵器の高坏である。12は方形のすかしを持つ有蓋高坏で、13と14は円形のすかしを持つ無蓋高坏である。11―16は手捏の土製支脚で、10―３は甕の転用支脚である。

以上より本住居址は、古墳時代中期末～後期前葉に位置付けられる。

第２表　Ｈ５号住居址出土遺物一覧表(1)

挿図番号	器種	法　量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備　考
10―１	甕	口径　18.2 底径　8.0 器高　34.5 胴径　25.7	最大径を胴部中央に持つ	胴部内外面ハケメ 口縁部内外面ヨコナデ	5YR5/8～2/1
10―２	小型甕	口径　13.5 底径　6.5 器高　13.4 胴径　15.7	最大径を胴部に持つ	口縁部内外面ヨコナデ 胴外面ハケメ後ヘラナデ 胴内面ヘラナデ	5 YR5/8
10―３	小型甕	口径　13.0 器高　16.2 底径　4.4	最大径を胴部に持つ	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面上半ハケメ後ナデ 胴部外面下半ケズリ後ナデ 内面ヘラナデ	5 YR6/6 カマド支脚
10―４	坏	口径　16.3 器高　8.5	内面に外稜を持つ 内面黒色処理	口縁部内外面ヘラミガキ 体部外面ヘラミガキ	7.5YR5/8
10―５	坏	口径　14.8 器高　6.6	内面に緩い外稜を持つ	内外面ヘラミガキ 口辺部外面ヨコナデ 内面黒色処理	7.5YR5/8 ～5/6
10―６	坏	口径（15.1） 器高（ 6.0）	内面に外稜を持つ	内面ヘラミガキ 体部上半ヘラミガキ 体下半ケズリ後ヘラナデ	2.5YR5/6
10―７	高坏	口径　14.0 現高　7.9	体部丸味を持つ	内面ヘラミガキ 口辺外面ヨコナデ 体部外面ケズリ後ナデ ナデ後ヘラミガキ	5 YR6/8
10―８	坏	口径　16.0 器高　6.0	底部丸味を持った平底	内外面ヘラミガキ	5 YR8/8
10―９	坏	口径　13.2 器高　6.0	体部・口辺内彎	底部ヘラケズリ後ヘラサキカキ 口辺内外面ヨコナデ 内面放射状暗文風ミガキ 外面ヘラミガキ 内外面赤色塗彩か	5 YR5/4 2.5YR4/6
10―10	坏	口径　11.4 器高　6.1	体部・口辺内彎	底部ヘラケズリ 口辺内外面ヨコナデ 体部外面ヘラナデ 内面横流放射状暗文風ミガキ 外面口辺赤色塗彩か	5 YR5/6
10―11	坏	口径　10.7 器高　4.7	体部内彎	底部ヘラケズリ 外面ナデ後ヘラミガキ 内面暗文風ヘラミガキ 内面「十字」暗文	7.5YR6/3 5 YR5/8
11―12	高坏（須）	口径　10.8 器高　10.0 脚径　8.6	マキアゲ、ミズビキ成形 脚三ヶ所に方形スカシ	体部下部ヘラケズリ	N6/0

第３表　Ｈ５号住居址出土遺物一覧表(2)

挿図番号	器種	法　量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備　考
11―13	無蓋高坏（須）	口径　12.9 器高　8.3 脚径　9.0	マキアゲ、ミズビキ成形 脚部三ケ所に円形スカシ	外面脚・体下部カキメ	2.5Y7/1～8/1
11―14	無蓋高坏（須）	口径　13.0 器高　8.9 脚径　8.9	マキアゲ、ミズビキ成形 脚部三ケ所に円形スカシ	外面脚、体下部カキメ	2.5Y7/1～8/1
11―15	坏	口径　12.1 器高　5.0	体部、口辺内彎	内面暗文風ヘラミガキ 内外面口辺ヨコナデ 外面ケズリ後ヘラナデ	5 YR5/8
11―16	土製支脚	長　14.6		手捏	7.5YR5/4
11―17	鉄鏃	現長　9.2 巾　2.8			

6）Ｈ６号住居址

Ｈ６号住居址は、下聖端遺跡の調査区南側、の・は―88・89グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。また、約半分をＭ１号溝状遺構とＦ６号掘立柱建物址によって破壊される。

ピットは、主柱穴４個と入口施設１個、貯蔵穴１個の計６個が確認された。なお貯蔵穴は南東コーナーにおいて検出された。また周溝はほぼ全周で確認された。

カマドは北壁中央において検出された。残存状況は極めて悪く、燃焼部が残存するのみであった。

本住居址は焼失住居址で、床面はかなり焼け、炭化材が散乱していた。

遺物は、土師器の甕・甑・坏・高坏等が出土している。12―７と８は甕である。７は壺とも考えられるが、定義付が曖昧なため甕の範疇に入れた。13―１は甑で、胴部が張るタイプである。13―２は小型甕で底部が丸底を呈している。13―３は横流の放射状の暗文風ヘラミガキが施される坏である。

以上より本住居址の所産期は、古墳時代中期末（カマド出現期）に位置付けられる。

7）H７号住居址

H７号住居址は、下聖端遺跡の調査区南側、そ・た―84・85グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において単独で検出された。

ピットは、主柱穴４個、入口施設２個、貯蔵穴１個、その他１個の計８個が確認された。なお貯蔵穴は北東コーナーにおいて検出された。また周溝はほぼ全周で確認され、東側からは周溝内ピットが検出された。

カマドは北壁中央において検出された。残存状況は比較的良好で煙道と煙道天井部・両袖が残存していた。また東袖は、構築材として高坏の体部が使用されていた。

本住居址は焼失住居址で、覆土最下層及び床面において炭化材小片が多量に認められた。

遺物は、土師器の甕・坏と臼玉９個等が出土している。13―４・５は坏である。４は外面外稜上に二本のヘラ描沈線が、内面に黒色処理が施され、５は内外面に黒色処理が施される。

以上より本住居址は、古墳時代後期の後葉に近い中葉に位置付けられる。

8）H８号住居址

H８号住居址は、下聖端遺跡の調査区南側、す～そ―81～83グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ上面において検出され、カマド北側を攪乱に、東側中央をD201号土坑によって破壊される。

ピットは、主柱穴４個、入口施設１個、貯蔵穴１個、その他１個の計７個が確認された。なお貯蔵穴は、南壁中央より張り出した形で設けられている。周溝は、ほぼ全周で確認され、周溝内ピットは51個が検出された。

カマドは北壁中央において検出された。残存状況は極めて悪く、袖の一部と燃焼部が残存するのみである。

本住居址は焼失住居址で、覆土最下層に炭化材小片が認められた。なお床面も焼けていた。

遺物は、土師器の甕・甑・坏・坏蓋の坏等が出土している。

以上より本住居址は、古墳時代後期の後葉に位置付けられる。

9）H９号住居址

H９号住居址は、下聖端遺跡の調査区南側、ち・つ―77～79グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。また北壁中央西よりを攪乱により破壊される。

ピットは、主柱穴４個、補助柱穴２個、入口施設４個、貯蔵穴１個の計11個が確認された。なお貯蔵穴は北東コーナーにおいて検出された。周溝は、ほぼ全周で確認され、周溝内ピットは12

個が検出された。

カマドは北壁中央において検出された。残存状況は比較的良好で、煙道・煙道天井部・両袖が残存していた。なお西袖の一部が攪乱により破壊される。

本住居址は焼失住居址と考えられるが、炭化材の量が極めて少い。なお床面は焼けていた。

遺物は、土師器の甕・甑・坏等が出土している。13―6と7は土師器の坏である。6は内外面に黒色処理が、7は内面に黒色処理がなされる。13―8は甕で、口縁部に最大径を持つ長胴甕である。

以上より本住居址は、古墳時代後期の後葉に位置付けられる。

10）H10号住居址

H10号住居址は、下聖端遺跡の調査区南より、せ・そ―77・78グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。また南東コーナーを攪乱溝により破壊される。

ピットは、主柱穴8個、入口施設3個、貯蔵穴1個の計12個が確認された。なお貯蔵穴は北東コーナーにおいて検出された。周溝は、ほぼ全周に渡って確認され、周溝内ピットは3個が確認された。

カマドは北壁中央において検出された。残存状況は比較的良好だが、天井部が崩壊している。

遺物は、土師器の甕と坏、編物石15本が出土している。

以上より本住居址は、古墳時代の後期に位置付けられる。

11）H11号住居址

H11号住居址は、下聖端遺跡の調査区南側より中央より、け～さ―73～75グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。

ピットは、主柱穴6個、補助柱穴3個、入口施設1個、貯蔵穴1個の計11個が確認された。貯蔵穴は南壁中央の張り出し部内において検出された。また周溝はほぼ全周で確認され、周溝内ピットは58個が検出された。

カマドは北壁中央において検出された。袖は石を基礎とし、粘土によって構築される。

本住居址は焼失住居址で、炭化材数本と炭化材小片が出土している。

遺物は土師器の甕・甑・坏等が出土している。14―1～3は甕である。1は口縁部に縦方向のヘラミガキが施される球胴甕で、2は最大径を胴部に持つ長胴甕、3は底部に木葉痕が施される小型甕である。14―4は小型甑である。14―4は小型甑で、14―5は内面に黒色処理がなされる

坏である。

以上より本住居址は、古墳時代後期の後葉に位置付けられる。

12）H12号住居址

H12号住居址は、下聖端遺跡の調査区中央南寄り、お・か―71・72グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。

ピットは主柱穴の１個が確認された。

カマドは北壁中央において検出された。

遺物は、土師器の坏が出土している。15―１と２は土師器の坏で、内面に黒色処理がなされる。

以上より本住居址は、古墳時代後期の後葉に位置付けられる。

13）H13号住居坏

H13号住居址は、下聖端遺跡の調査区北側、う・え―22～24グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において単独で検出された。

ピットは、主柱穴の４個と入口施設の１個の計５個が確認された。周溝はほぼ全周に渡って確認され、周溝内ピットは28個が検出された。

カマドは北壁中央において検出された。残存状況は、袖石と袖・支脚石２本が残るのみである。

遺物は、土師器の甕・高坏・坏と須恵器の蓋等が出土している。15―３は須恵器の蓋である。15―４は坏である。15―５は高坏で体部の内面に黒色処理がなされる。また他に畿内型暗文（らせん状暗文と放射状暗文の組み合せ）を持つ坏が出土している。

以上より本住居址は、奈良時代の中葉に位置付けられる。

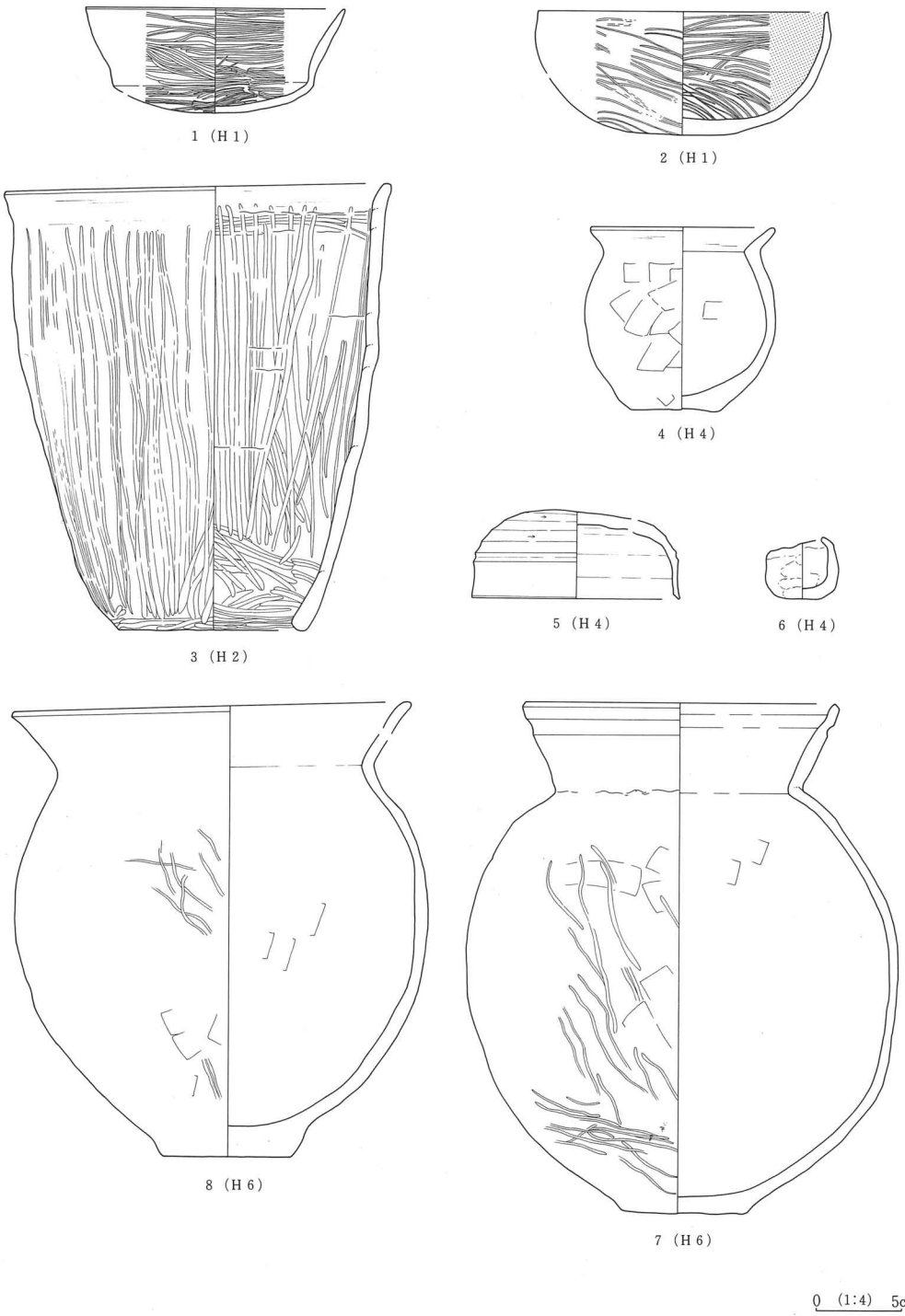
2　掘立柱建物址

1）Ｆ１号掘立柱建物址

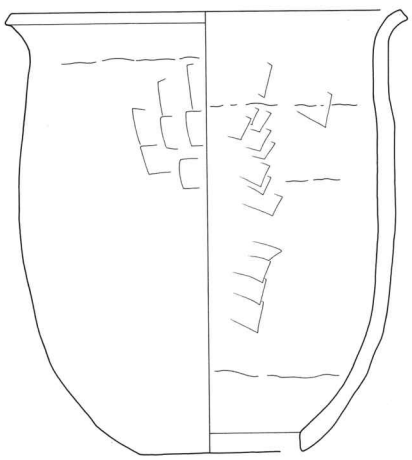
Ｆ１号掘立柱建物址は、上大林遺跡の調査区北側、く～こ―３～５グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。また、D62号・D65号・D68号・D69号～D71号・D63号・D74号土坑によって破壊される。

本址は３間×３間の掘立柱建物址で、南北軸より東西軸の方が長くなっている。

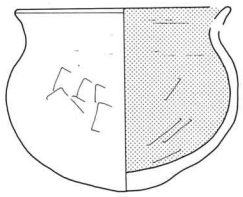
遺物等の出土はなく、所産期は不明だが、Ｈ１号住居址との位置関係より、同一時期と推定される。



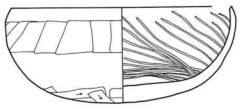
第12図　H１号・H２号・H４号・H６号住居址出土遺物実測図



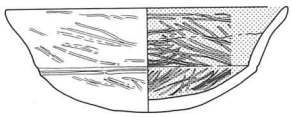
1（H 6）



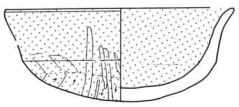
2（H 6）



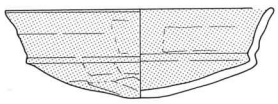
3（H 6）



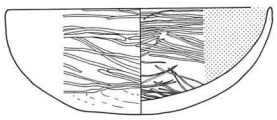
4（H 7）



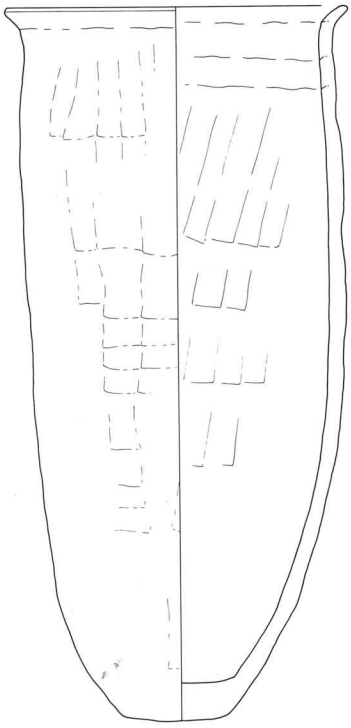
5（H 7）



6（H 9）



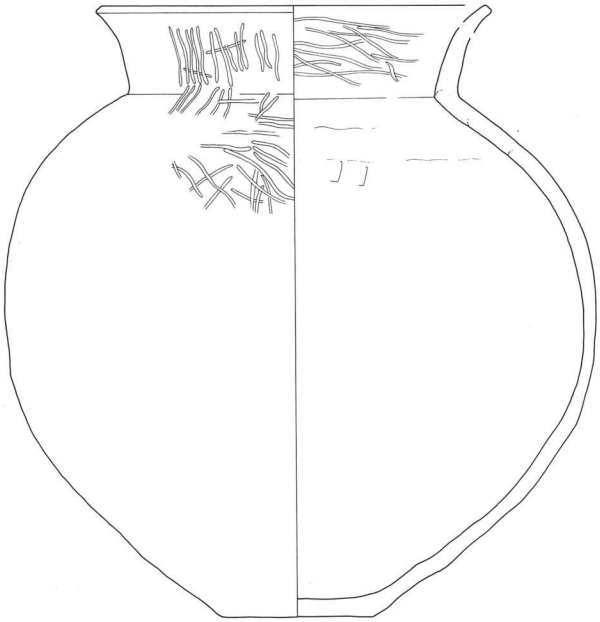
7（H 9）



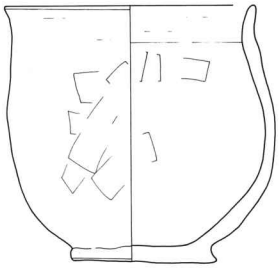
8（H 9）

0 (1:4) 5cm

第13図　H 6号・H 7号・H 9号住居址出土遺物実測図

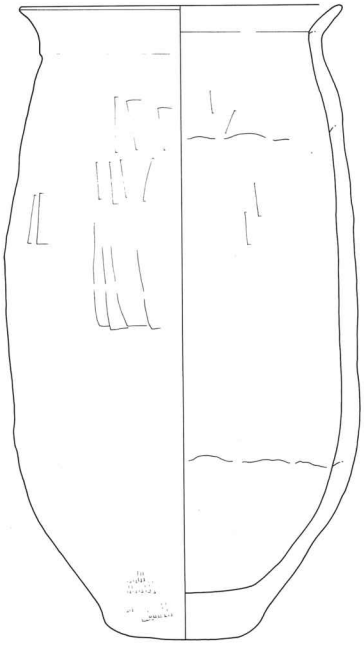


1

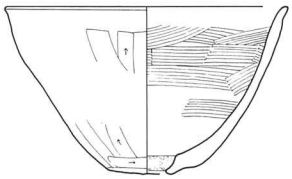


1

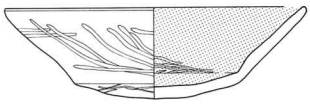
3



2



4



5

0 (1:4) 5cm

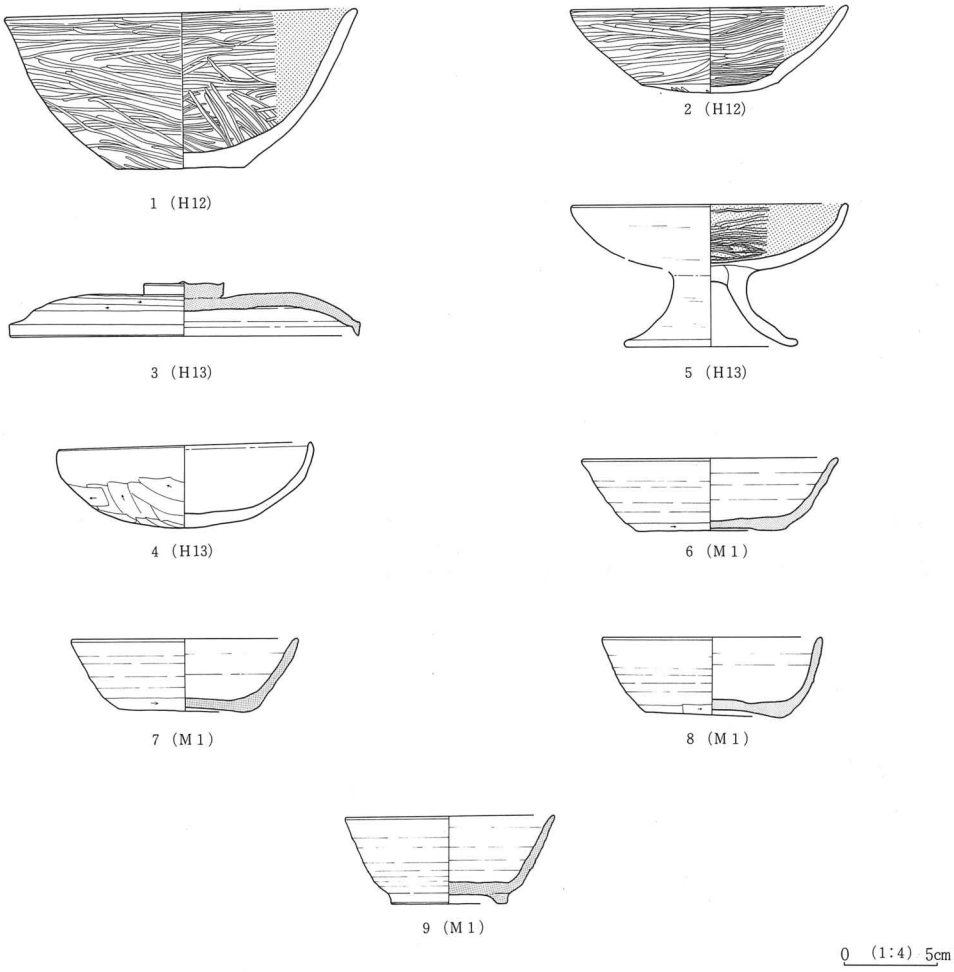
第14図　H11号住居址出土遺物実測図

第4表　H1号・H2号・H4号・H6号・H7号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
12—1 H1	坏	口径 14.8 器高 6.1	体部下半に稜を持ち、稜より外反して立ち上がる	全面ヘラミガキ	10YR7/4
12—2 H1	坏	口径(16.6) 器高 7.0	体部・口辺内彎	内外面ヘラミガキ 底部外ヘラケズリ後ヘラナデ 内面黒色処理	10YR7/4
12—3 H2	甑	口径 21.6 器高 25.6 孔径 10.8	胴部直線的に外傾	外面ヘラナデ後ヘラミガキ 内面　同上	外10YR7/4 内7.5Y7/4
12—4 H4	小型甕	口径 10.4 器高 10.6 底径 5.0	底部平底 頸部「く」の字に折れる	内外面ヘラナデ	内5YR5/4 外7.5YR4/4
12—5 H4	坏蓋	口径 11.9 器高 5.1	マキアゲ、ミズビキ成形	天井部回転ヘラケズリ	5YR6/8
12—6 H4	手捏	口径 3.2 器高 3.6	手捏		10YR7/4
12—7 H6	甕	口径 17.9 頸径 14.3 胴径 25.0 底径 7.0 器高 29.5	口縁部に沈線 球胴	胴外面ハケメ後ヘラナデとさらにヘラミガキ 胴内面ハケメ後ヘラナデ	内10YR6/4 外7.5YR5/4
12—8 H6	甕	口径 22.6 胴径 23.9 底径 7.2 器高 26.3	球胴	胴外面ハケメ後ヘラナデとさらにヘラミガキ 胴内面ハケメ後ヘラナデ	10YR2/6 ～4/6
13—1 H6	甑	口径 20.8 孔径 8.6 器高 23.5	胴部に丸味を持つ	口縁部内外面ヨコナデ 内外面ケズリ後ヘラナデ	7.5YR6/3 ～6/4
13—2 H6	小型丸底甕	口径 11.0 胴径 12.3 器高 9.7	底部丸底	口縁部内外面ヨコナデ 外面ヘラケズリ後ヘラナデ 内面ヘラナデ後黒色処理	外7.5YR4/2
13—3 H6	坏	口径 11.6 器高 5-1	体部・口辺内彎	口辺内外面ヨコナデ 体部外面ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面横流放射暗文風ヘラミガキ	5YR5/8
13—4 H7	坏	口径 14.9 器高 5.5	体部下半に稜を持ち、稜より外反して立ち上がる	全面ヘラミガキ 内面黒色処理	7.5YR6/8
13—5 H7	坏	口径 12.0 器高 5.0	体部内彎し、口辺外反する	口辺内外面ヨコナデ 体部ヘラナデ、一部ミガキ 底部ヘラケズリ、一部ミガキ 内面ヨコナデ、黒色処理	

第５表　Ｈ９号・H11号・H12号・H13号出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法　量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備　考
13―6 Ｈ９	坏	口径　14.2 器高　4.7	体部は稜を持つ	内外面ヨコナデ 内外面黒色処理	10YR7/1
13―7 Ｈ９	坏	口径　14.0 器高　5.6	体部・口辺内彎	内外面ヘラミガキ 内面黒色処理	5 YR5/8
13―8 Ｈ９	甕	口径　17.8 胴径　17.1 底径　5.5 器高　38.0	長胴	胴外面ケズリ後ヘラナデ 胴内面ヘラナデ	7.5YR5/4 ～6/4
14―1 H11	甕	口径　20.4 器高　32.5 胴径　31.5 底径　8.0	球胴	口縁部外面ヨコナデ後ミガキ 外面ヘラミガキ 内面ヘラナデ	7.5YR5/4 ～5/3
14―2 H11	甕	口径　16.8 胴径　18.7 底径　8.0 器高　33.7	長胴	胴外面ハケメ後ヘラナデ 内面同上	7.5YR6/3 ～6/4
14―3 H11	小型甕	口径　13.2 胴径　14.2 器高　13.7 底径　7.6	底部平底 胴下部でふくらむ	口縁部内外面ヨコナデ 外面ケズリ後ヘラナデ 内面ヘラナデ 底部木葉痕	内7.5YR6/4 外 5 YR5/3
14―4 H11	小型甑	口径　14.8 器高　8.9 孔径　2.0	胴部直線的に外傾	口辺部内外面ヨコナデ 胴外面ヘラケズリ 胴内面ハケメ 孔部内面指ナデ	外7.5YR7/6 内 5 YR7/6
14―5 H11	坏	口径　15.9 器高　4.9	外稜より直線的に外傾	体部外面ヘラミガキ 底部外面ヘラミガキ 口辺内外面ヨコナデ 体部内面ヘラミガキ・黒色	7.5YR6/6
15―1 H12	坏	口径　18.4 器高　8.2 底径　6.7	やや内彎して外傾	内外面ヘラミガキ 内面黒色処理	7.5YR5/6
15―2 H12	坏	口径　14.6 器高　4.5	直線的に外傾	内外面ヘラミガキ 内面黒色処理	5 YR5/6
15―3 H13	蓋（須）	口径　18.4 つまみ 4.2		内外面回転ヘラケズリ 口辺のみヨコナデ	5 Y5/2
15―4 H13	坏	口径　13.4 器高　4.4	体部・口辺内彎	口辺内外面ヨコナデ 体外面ヘラケズリ	7.5YR6/4
15―5 H13	高坏	口径　14.5 器高　7.5 脚径　8.8		外面ヨコナデ 体部内面ヘラミガキ 内面黒色処理	10Y R7/4



第15図　H12号・H13号住居址・M1号溝状遺構出土遺物実測図

2）F2号掘立柱建物址

F2号掘立柱建物址は、下聖端遺跡の調査区南側、て・と—81・82グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。

本址は2間（1間）×3間の掘立柱建物址で、南北軸より東西軸の方が長くなっている。

遺物等の出土はなく所産期は不明である。

3）Ｆ３号掘立柱建物址

Ｆ３号掘立柱建物址は、下聖端遺跡の調査区中央、う・え―64～66グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。

本址は２間×２間（或は３間）の掘立柱建物址と考えられる。

遺物等の出土はなく、所産期は不明である。

4）Ｆ４号掘立柱建物址

Ｆ４号掘立柱建物址は、下聖端遺跡の調査区南側の中央寄り、く～こ―73・74グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。

本址は２間×３間・３間×２間～４間という不規則な柱列を持つ掘立柱建物址である。

遺物等の出土はないが、H11号住居址との位置関係より、ほぼ同時期ではないかと推定される。

5）Ｆ５号掘立柱建物址

Ｆ５号掘立柱建物址は、下聖端遺跡の調査区南側、け～さ―76～78グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。

本址は２間×２間の掘立柱建物址で、南北軸より東西軸の方が若干長くなっている。

遺物等の出土はなく、所産期は不明である。

6）Ｆ６号掘立柱建物址

Ｆ６号掘立柱建物址は、下聖端遺跡の調査区南側、は～ふ―88～90グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。またＭ１号溝状遺構によって破壊される。

本址は２間×２間の掘立柱建物址で、南北軸より東西軸の方が長くなっている。

遺物は、古墳時代後期の高坏脚部、坏片、甕片、臼玉等が出工している。

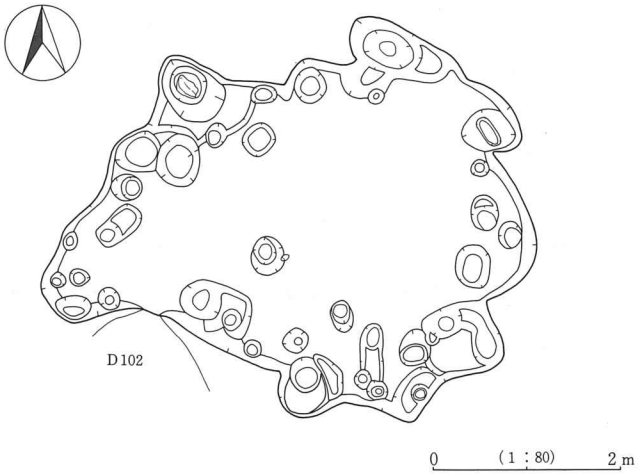
7）Ｆ７号掘立柱建物址

Ｆ７号掘立柱建物址は、下聖端遺跡の調査区南側、は・ひ―86・87グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。またＭ１号溝状遺構によって南側を、攪乱によって北側を破壊される。

本址は２間×２間の掘立柱建物址である。

遺物は出土せず、所産期は不明である。

3　特殊遺構



第16図　Ｔ２号特殊遺構実測図

第１号特殊遺構は、下聖端遺跡の調査区中央において検出された旧沼地跡である。

第２号特殊遺構は、第１号特殊遺構の西側において検出された。掘込内を二重にピットが回り、入口施設らしきものが南に向かって突出している。遺物は全く出土せず、所産期は不明だが、形態が縄文時代の住居址に類似しているが、建築途中の住居址と強く断定はできない。

第３号特殊遺構は、下聖端遺跡の調査区南側において検出された円形柱列である。

第４号特殊遺構は、下聖端遺跡の調査区南側において検出された円形溝状遺構である。

第５号特殊遺構は、下聖端遺跡の調査区南側において検出された旧湿地跡である。

第６号・第７号特殊遺構は、下聖端遺跡の調査区南側において検出された。両遺構は、Ｈ３号住居址の床面を掘り込んで造った墓壙である。なお掘り込んだ際の土砂は、Ｈ３号の床にそのまま盛り上げている。遺物は、臼玉と土師器、骨片が出土している。所産期はＨ３号が古墳時代中

期末と想定されるため、それとほぼ同一時期が若干新しい時期を与えられよう。

4　土坑

Ｄ１号・D112号・D144号土坑は落し穴と考えられる。

Ｄ１号土坑は、上大林遺跡の調査区北側、Ｈ１号住居址東側において検出された。床面に２個のピットが確認された。なお遺物は全く出土しなかった。

D112号・D144号土坑は、下聖端遺跡の調査区中央、北側の旧河川跡と南側のＴ１号特殊遺構（旧沼跡）の中間において検出された。両土坑共に床面に２個のピットが確認された。なお遺物等は全く出土しなかった。

これらの土坑は、立地（水辺に近い）と形態（ピットを持ち、床面がフラット）から落し穴と断定した。

5　溝状遺構

1）Ｍ１号溝状遺構

Ｍ１号溝状遺構は、下聖端遺跡の調査区南側を東西に横切る。またＨ２号・Ｈ３号・Ｈ６号住居址とＦ７号掘立柱建物址を破壊する。

床面はかなり凹凸が激しく、Ｈ６号付近で４つに分流している。

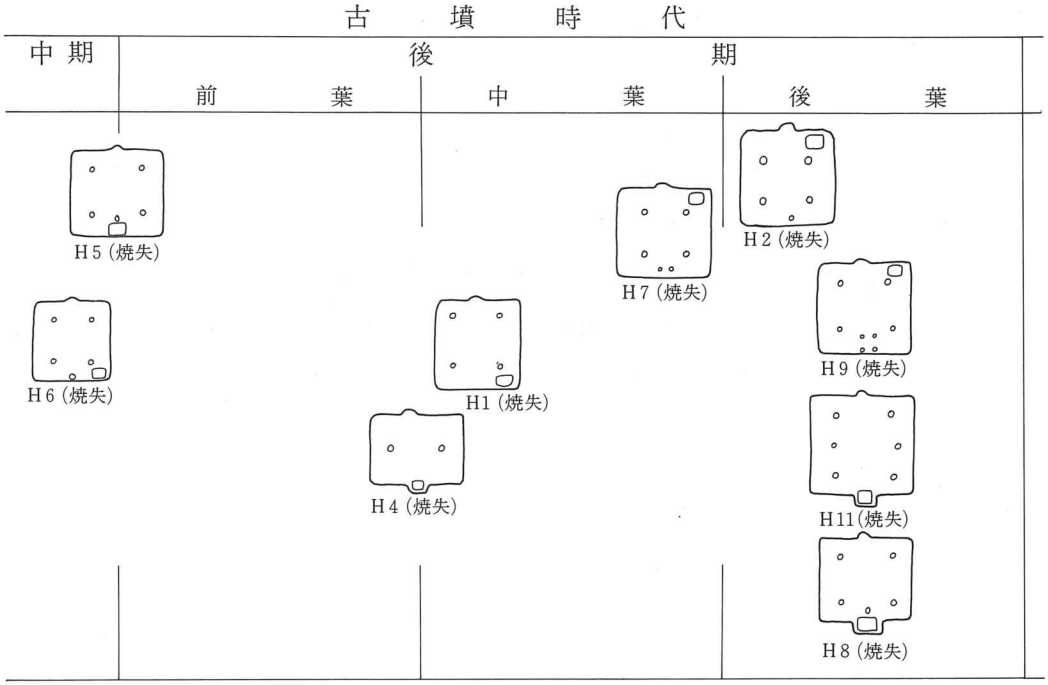
遺物は古墳時代～奈良時代が主で、平安時代中葉以降の遺物は出土しなかった。３－１は小型

第６表　Ｍ１号溝状遺構出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法　量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備　考
15－6	坏（須）	口径　13.6 底径　8.0 器高　3.6	体部・口辺直線的に外傾	底部回転糸切り後外周を回転ヘラケズリ 内外面ロクロヨコナデ	5 YR4/3 10YR6/1～4/1
15－7	坏（須）	口径　12.1 底径　6.8 器高　3.8	体部、口辺直線的に外傾	底部回転糸切後外周を回転ヘラケズリ 内外面ロクロヨコナデ	5 YR3/2～4/1
15－8	坏（須）	口径　12.1 底径　6.9 器高　4.1	口縁大きく歪む 体部、口辺直線的に外傾	底部回転糸切り後外周を回転ヘラケズリ 内外面ロクロヨコナデ	N4/0
15－9	坏（須）	口径　10.8 台径　6.2 器高　4.8	口縁わずかに歪む 貼付高台	底部回転糸切り後高台貼付 内外面ロクロヨコナデ	7.5GY4/1

丸底壺で全面にで全面に暗赤褐色の塗彩がなされる。3－2は小型甕で胴部に把手が付され、内面に黒色処理がなされる。3－3は須恵器の坏で、底部回転ヘラケズリの後「常」の字がヘラで刻書される。15－6～9は須恵器の坏で、9を除いて底部回転糸切り後に外周に回転ヘラケズリを行っている。3－3は奈良時代中葉、15－6～9は奈良時代後葉の様相を持っている。その他に布目瓦片、須恵器の壺・甕・蓋、土師器の甕・坏・埦・高坏・甑等多量の遺物が出土している。

第IV章　まとめ



第17図　住居址・貯蔵穴変遷図

第17図は、今回検出された古墳時代後期を中心とした住居址と貯蔵穴の変遷図である。ここに各地区より検出された住居址を入れていくと何らかの傾向がとらえられそうであるが、今回は概報でもあり、紙面の関係上、次年度刊行了定の本報告書に預たい。また貯蔵穴を持たないH3号住居址とH10号住居址は偶然ながら焼失住居址ではなかった。なお位置付けは、1988年刊行の『大井城跡』（王城・黒岩城・石並城）中の古墳時代後期の土器編年を参照した。

参考文献

佐久市教育委員会　1976　『市道』

〃　1978　『上桜井北』

〃　1978　『跡部町田』

〃　1981　『舞台場』

〃　1981　『芝宮遺跡（第２次）』

〃　1986　『大井城跡』（黒岩城）

〃　1988　『大井城跡』（王城・石並城・黒岩城）

〃　1988　『前田遺跡』（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）

〃　1988　『鋳師屋遺跡Ⅱ』

〃　1988　『下芝宮遺跡』

御代田町教育委員会　1987　『前田遺跡』

〃　1988　『十二遺跡』

小諸市教育委員会　1988　『鋳物師屋』

北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所　1987
『第８回三県シンポジウム　東国における古式須恵器をめぐる諸問題』

㈶大阪文化財センター　1980　『陶邑　Ⅰ』

〃　1979　『陶邑　Ⅳ』

浜松市教育委員会　1987　『伊場遺跡遺物編４』

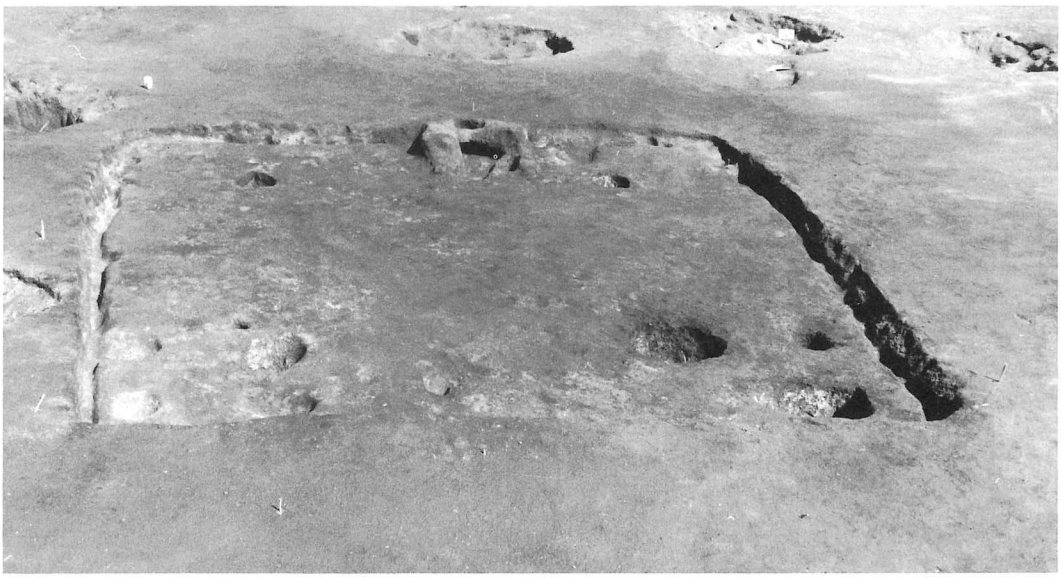
静岡県考古学会　1979　『シンポジューム２　須恵器―古代陶質土器―の編年』

㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1982　『桜山窯跡群』

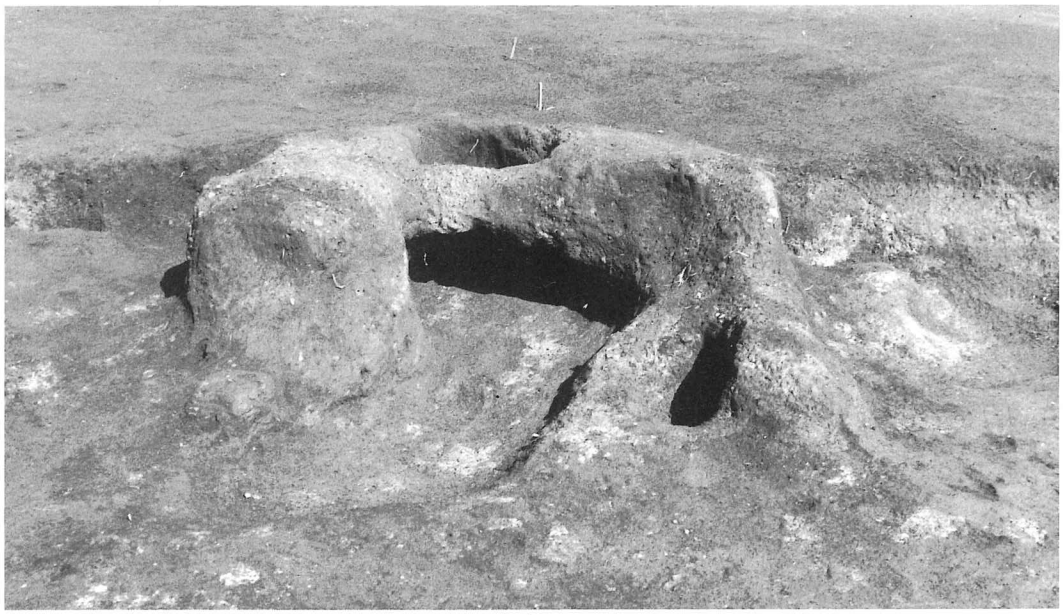
〃　1983　『三ケ尻天王・三ケ尻林（１）』

〃　1983　『後張』

三重県教育委員会　1988　『井田川茶臼山古墳』



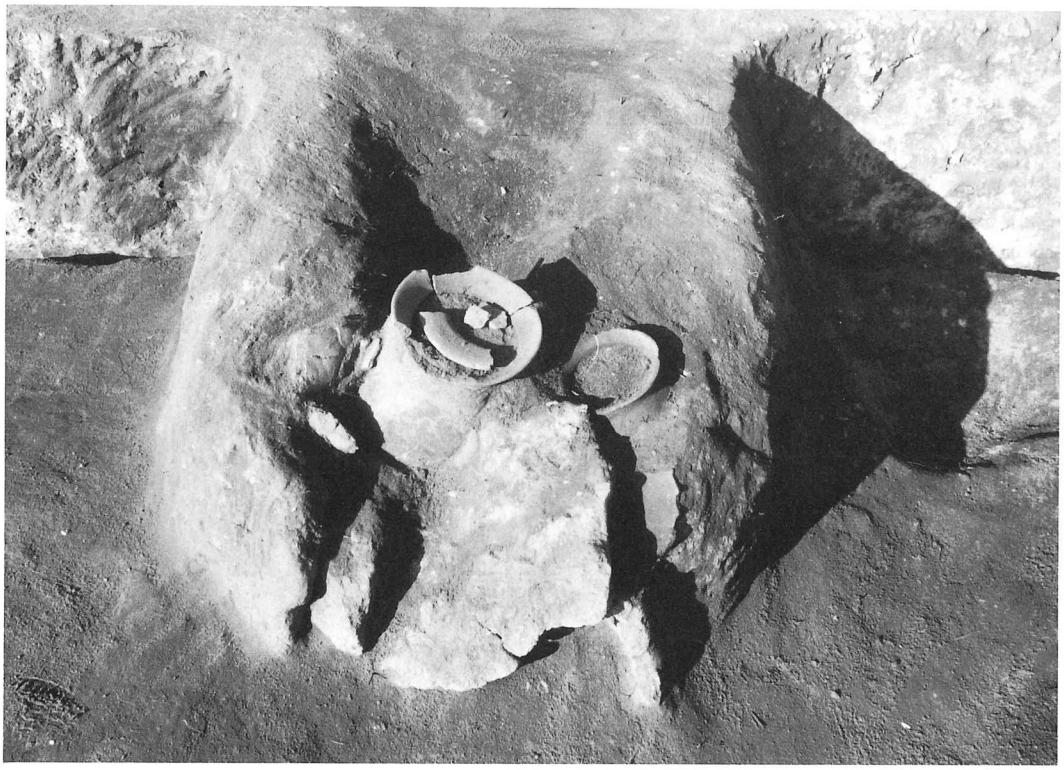
Ｈ１号住居址（南より）



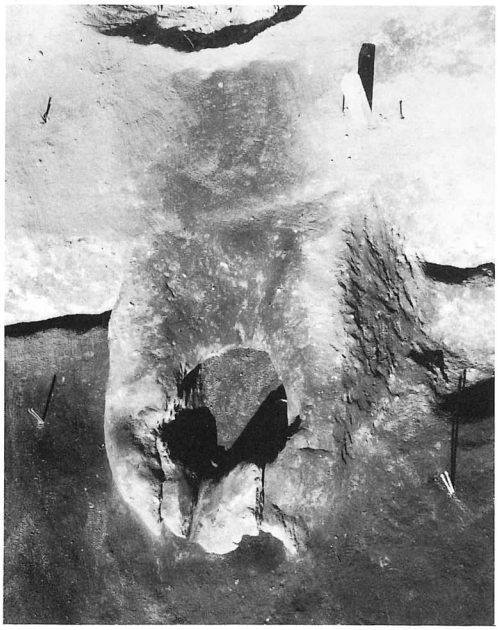
Ｈ１号住居址カマド

Ｈ５号住居址（南より）

Ｈ５号住居址　炭化材出土状態（東より）



Ｈ５号住居址カマド　遺物出土状態

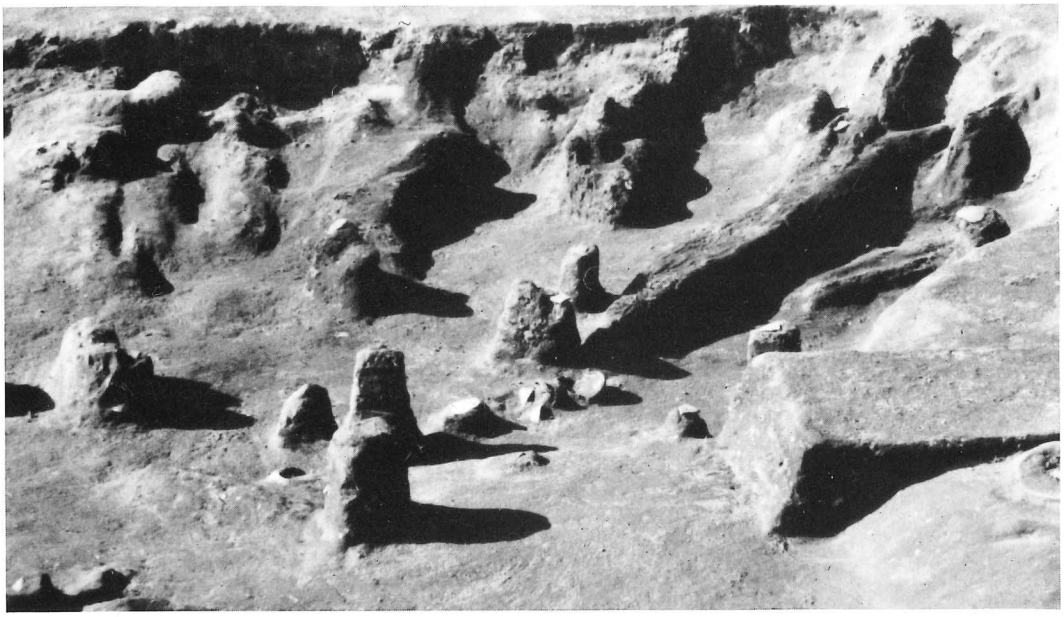


Ｈ５号住居址カマド（カケアナ）

Ｈ５号住居址（煙道検出）

図版 四

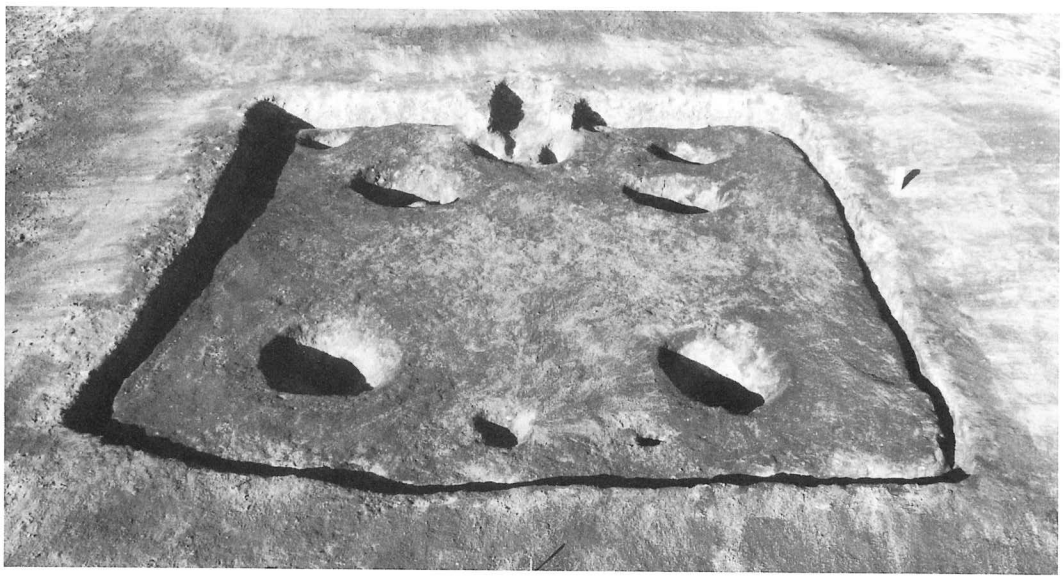
Ｈ５号住居址カマド　土製支脚・甕転用支脚出土状態



Ｈ５号住居址　須恵器高坏他出土状態

Ｈ５号住居址北西コーナー　須恵器高坏・炭化材出土状態

Ｈ２号住居址（南より）



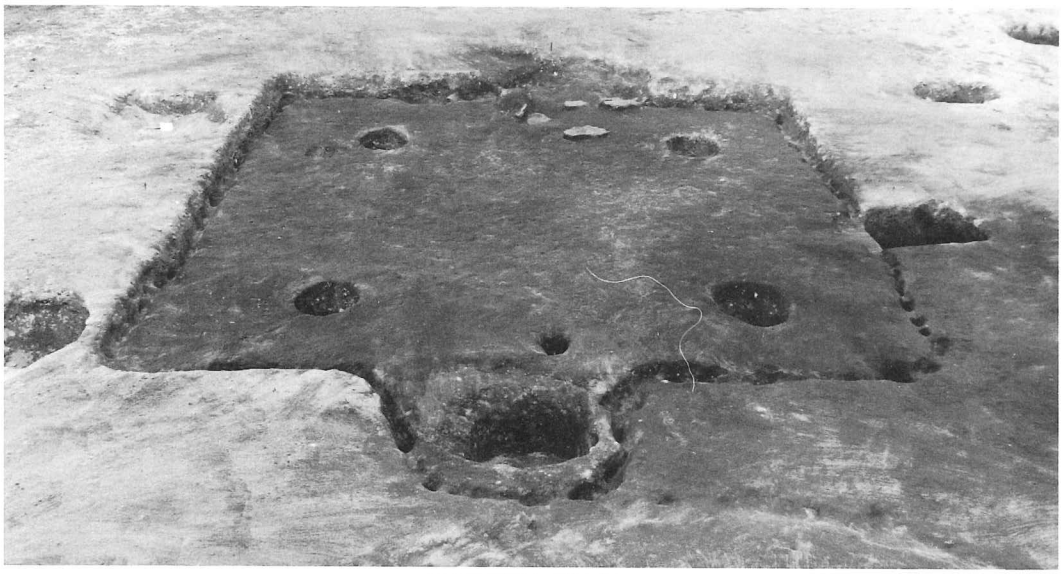
Ｈ７号住居址　柱穴及びカマド掘方（南より）

Ｈ７号住居址カマド

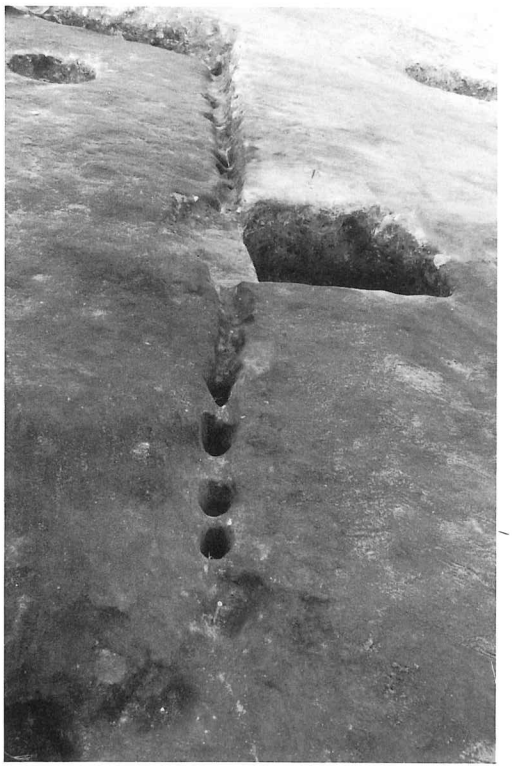
Ｈ７号住居址カマド（南より）

Ｈ７号住居址カマド煙道（北より）

少年考古学教室

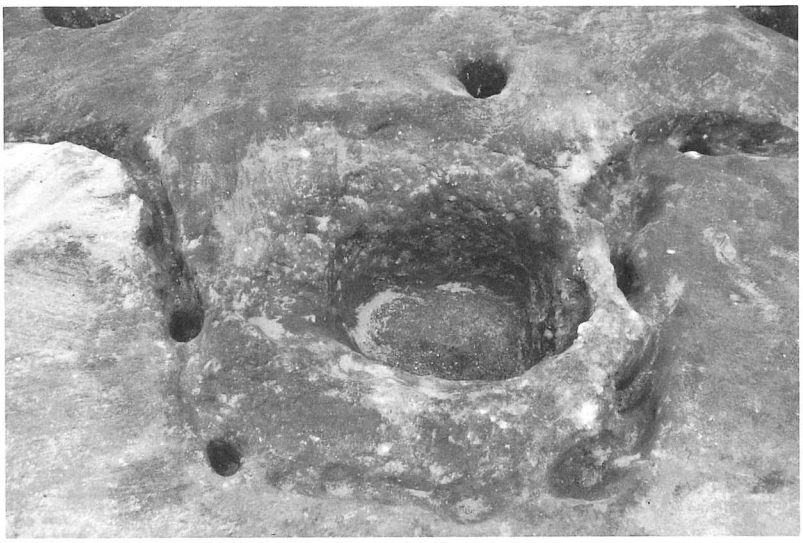


Ｈ８号住居址（南より）

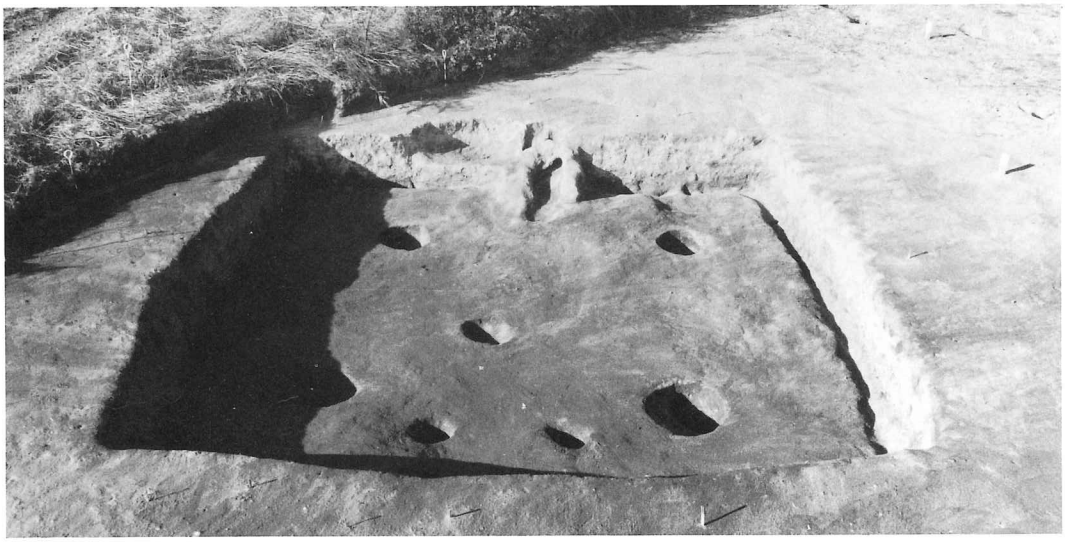


Ｈ８号住居址東側
周溝内ピット

Ｈ８号住居址南側
周溝内ピット



Ｈ８号住居址　貯蔵穴及び周辺ピット



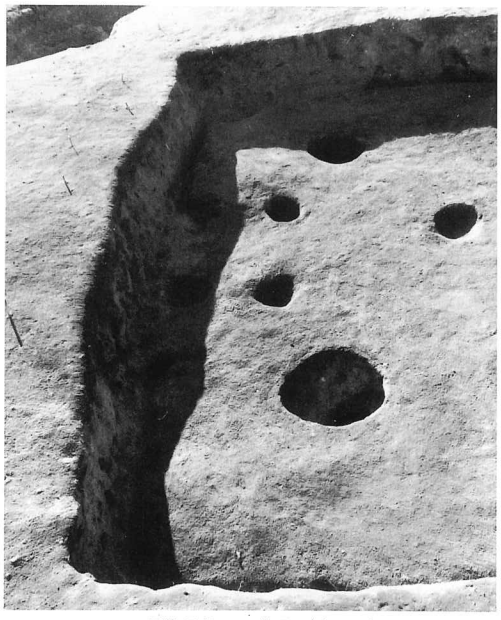
Ｈ９号住居址（南より）

調査スナップ

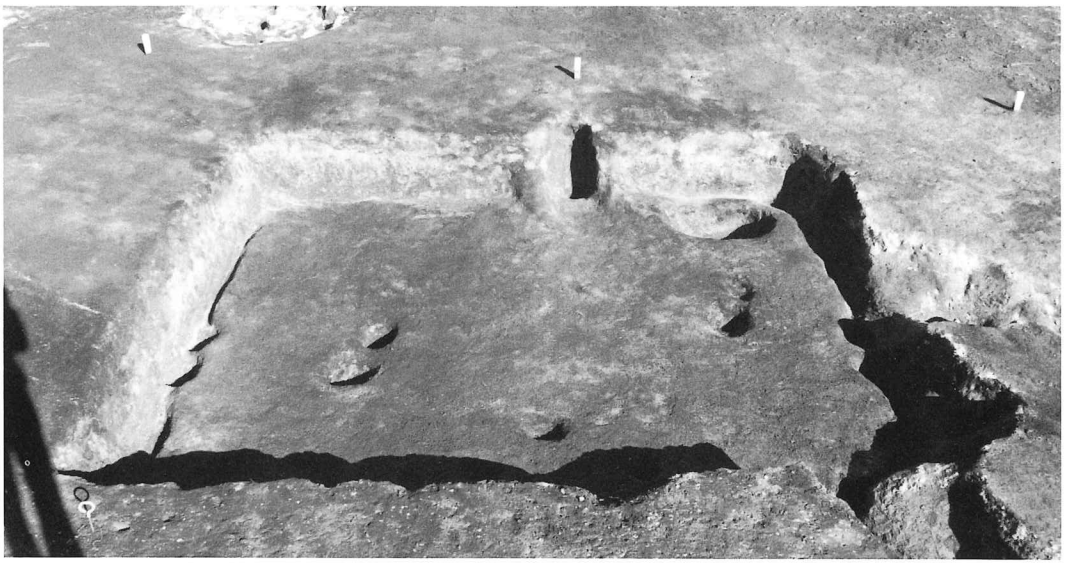
図版 十

Ｈ９号住居址カマド

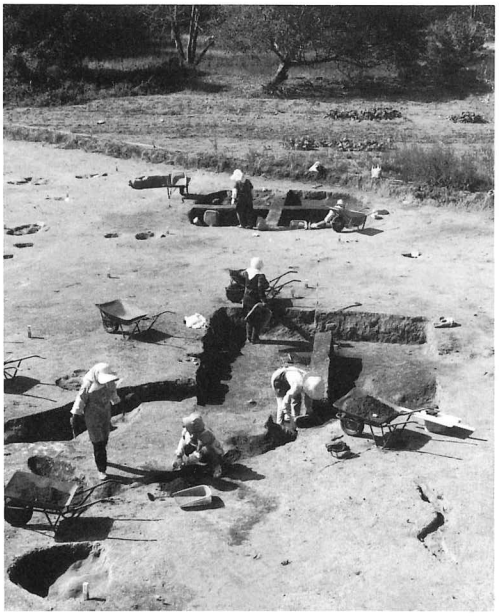
Ｈ９号住居址カマド煙道（北より）



Ｈ９号住居址入口施設（東より）



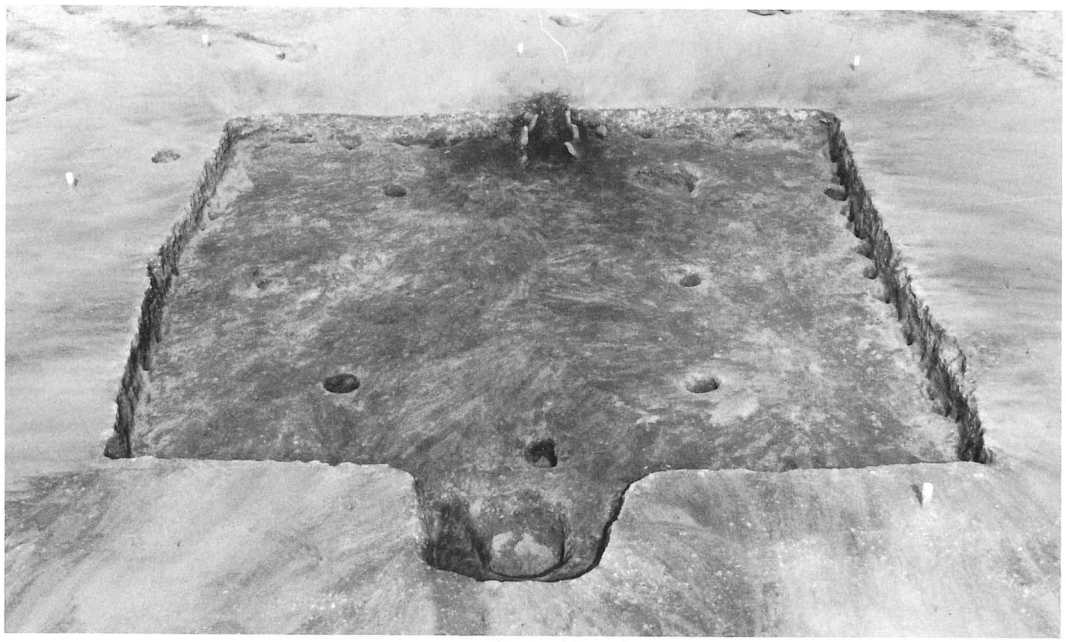
H10号住居址（南より）



H 9・10号住居址調査状況（東方より）

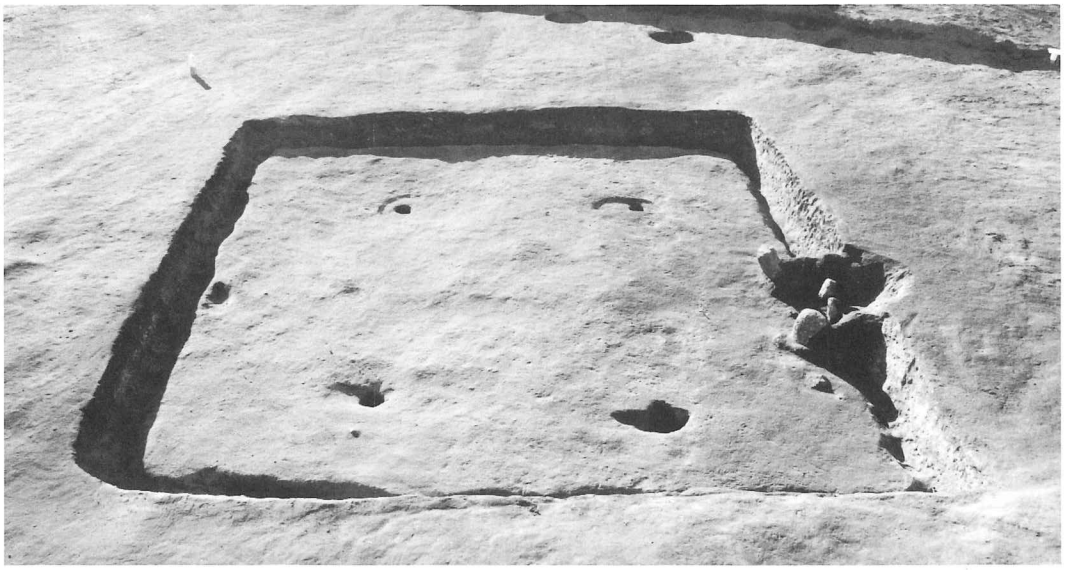
調査スナップ

上大林遺跡全景（南より）



H11号住居址（南より）

H11号住居址カマド

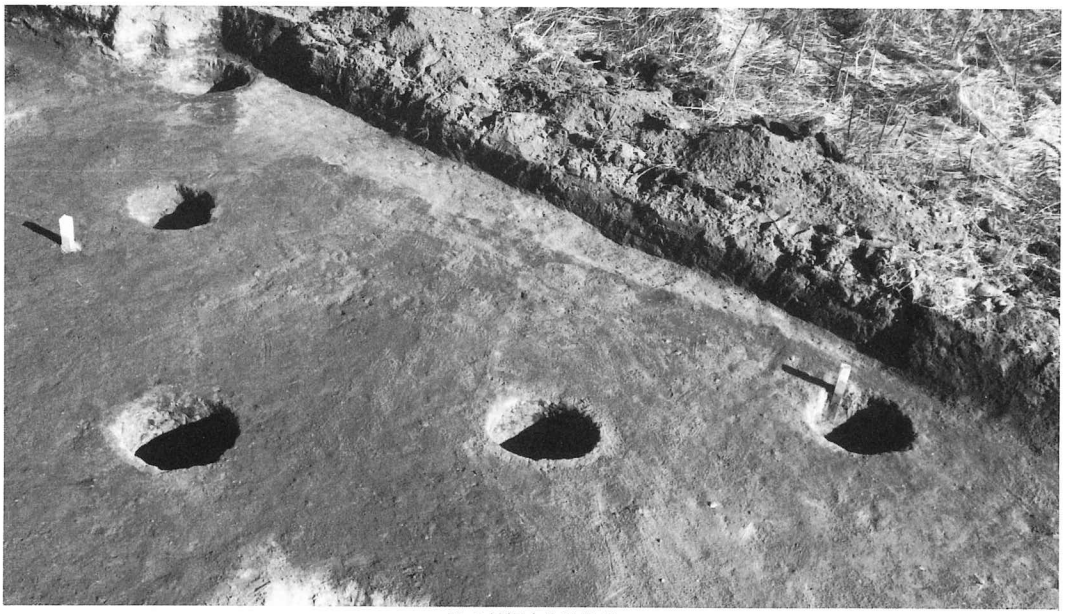


H13号住居址（東より）

H６号住居址及びF６号掘立柱建物址（西より）

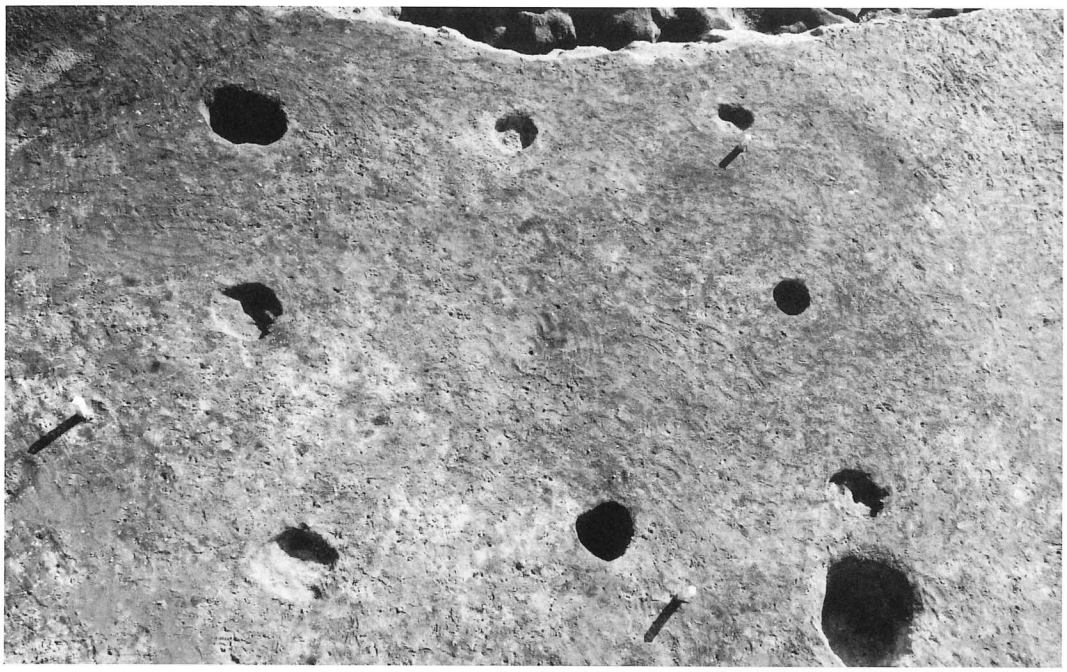
図版 十四

Ｆ２号掘立柱建物址（南より）



Ｆ３号掘立柱建物址

Ｈ５号住居址調査風景



Ｆ５号掘立柱建物址（北より）

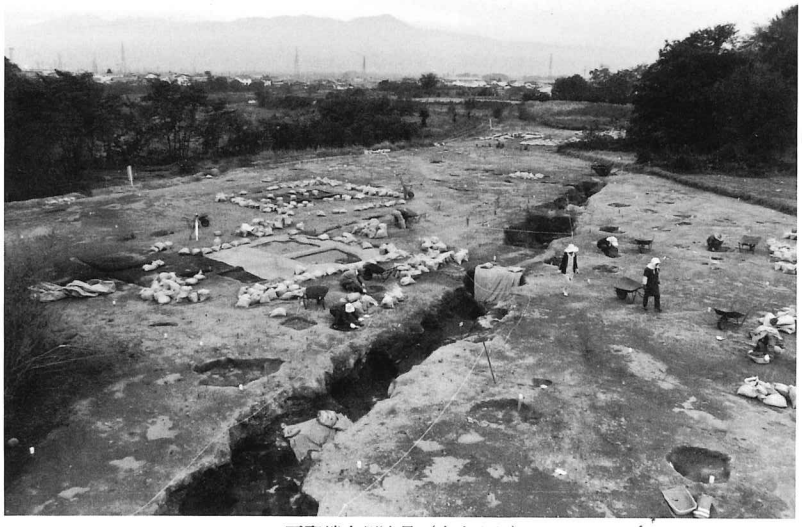
Ｆ７号掘立柱建物址（南より）

図版　十六

Ｔ１号特殊遺構（旧沼地）西より

Ｔ２号特殊遺構（北より）

Ｔ３号特殊遺構（円形柱列）東より



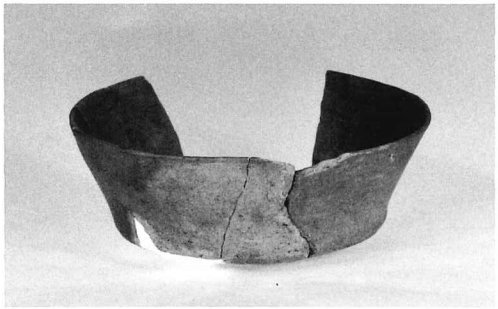
下聖端南側遠景（東方より）

Ｄ１号土坑（南より）

Ｄ１号土坑（東より）

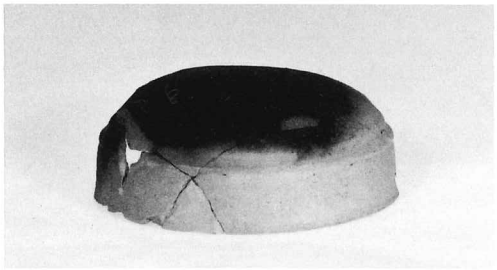
Ｄ112号土坑（南より）

Ｄ144号土坑（北より）

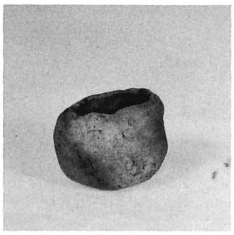


Ｈ１　12－１

Ｈ１　12－２



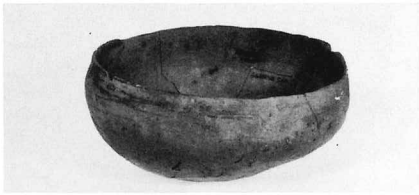
Ｈ４　12－５



Ｈ４　12－６

H 2　12－3

H 4　12－4

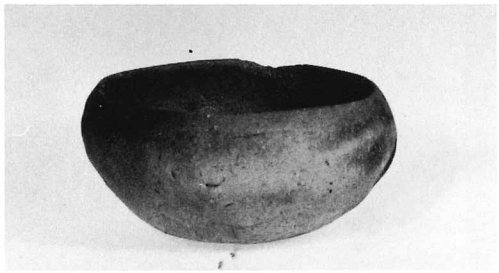


H 5　10－11

H 5　10－8

H 5　10－6

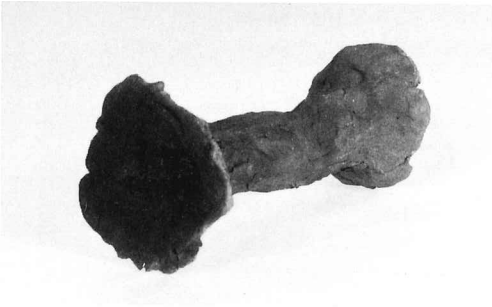
H 5　10－10



H 5　10－9

H 5　10－1

H 5　11－17 (1/1)

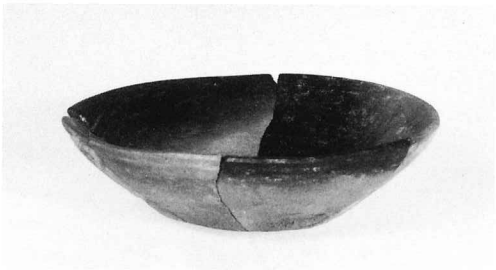


H 5　11－16

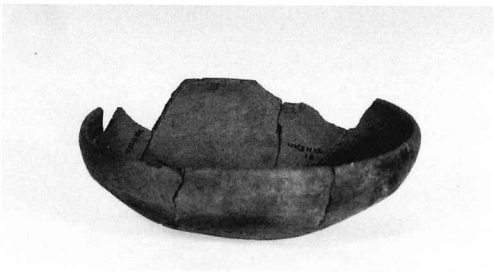
H 5　10－2

H11　14－4

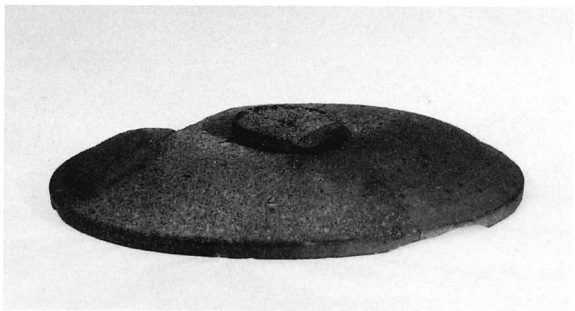
H12　15－1



H12　15－2



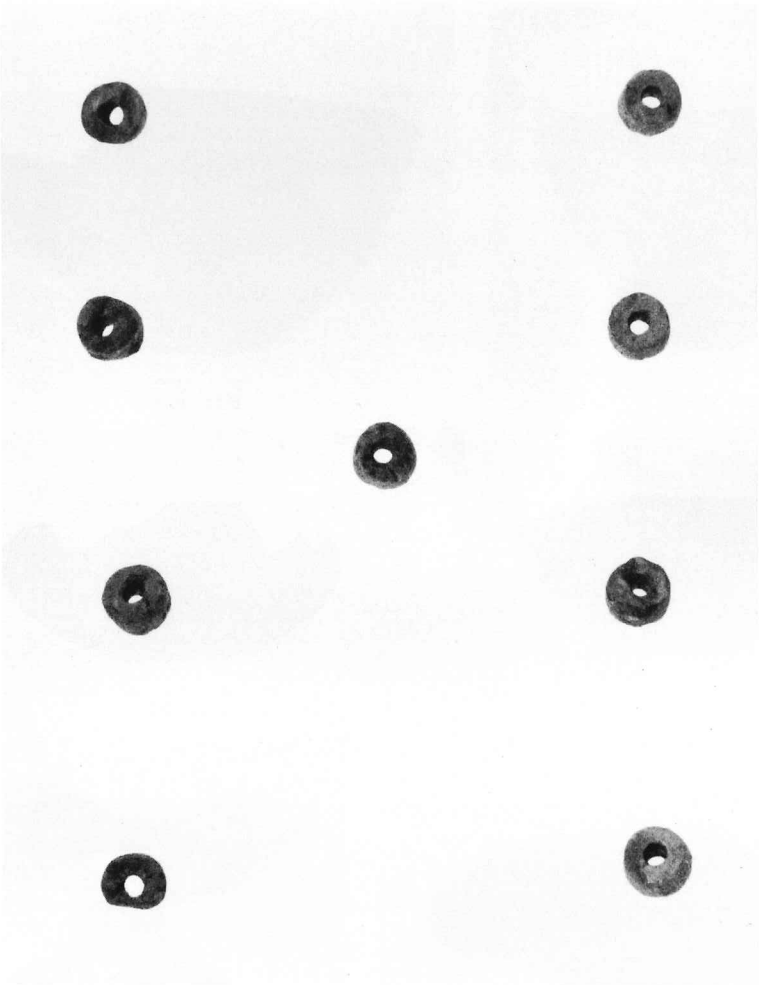
H13　15－4



H13　15－3

H13　15－5

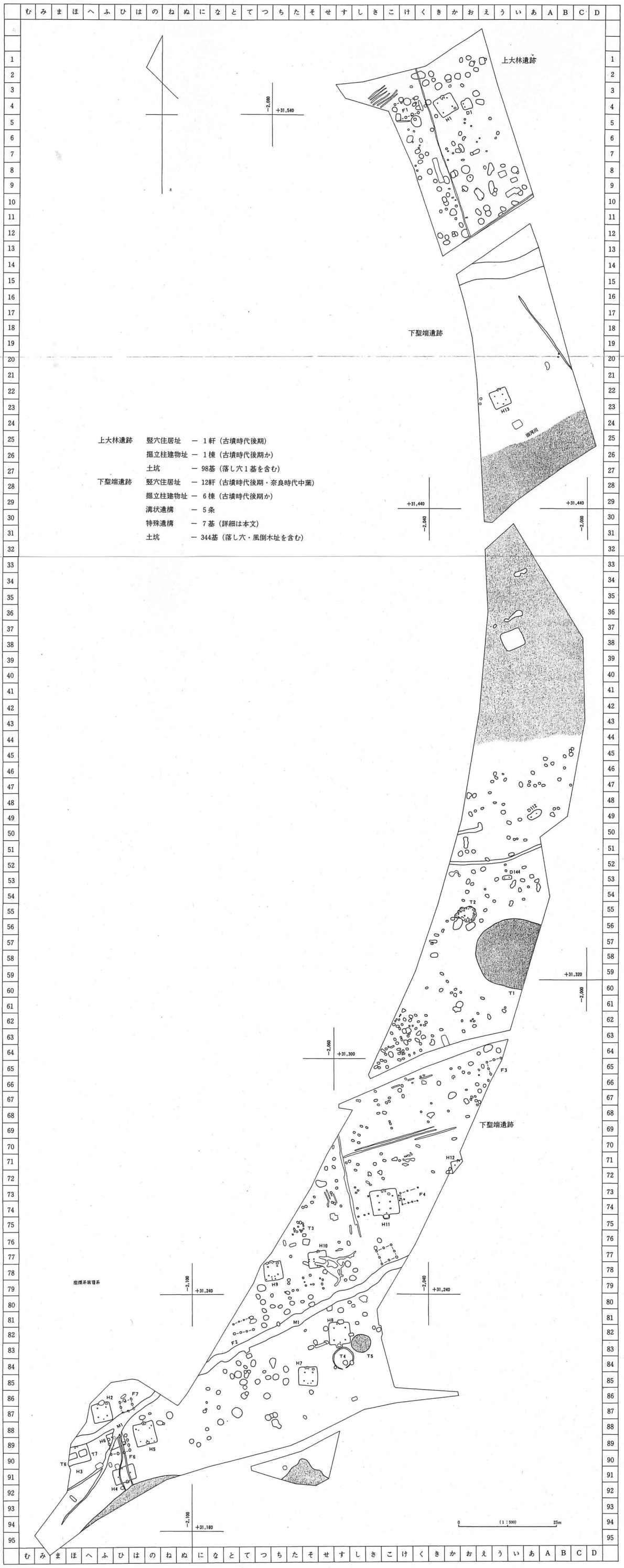
旧河跡（南より）



Ｈ７号住居址出土臼玉

Ｔ１作業風景

上大林・下聖端遺跡遠景（東より）　撮影 ㈱協同測量社



付図　長土呂遺跡群上大林・下聖端遺跡全体図（1：500）

長土呂遺跡群
上大林・下聖端遺跡
長野県佐久市長土呂上大林・下聖端遺跡発掘調査概報

1989年3月

編集者　上大林・下聖端遺跡発掘調査団
発行者　佐久市教育委員会
佐久市大字中込3056
電話　0267－62－2111㈹
印刷所　株式会社佐久印刷所